
あなたの隣は私でしょ

木村よし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの隣は私でしょ

【ZPDF】

Z5682D

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

9/30更新 『たく、可愛くねーな』『うつさい！バカ拓也』
幼馴染の拓也が好きな尚美。恋敵の柴山さんに苦戦中の尚美に、やたらとちよつかいを出してくる河本という先輩も現れて・・・。『おい、マナイタ』『胸がなくてわるかったわね！』すれ違いのラブコメストーリー

1・美奈にララバイ（前書き）

アクセスしていただき、ありがとうございます！

尚美と拓也と美奈の恋を、暖かく見守つてやってください。
また、批評や感想は木村よしの力になり、励みになります。
なので書き込みもよろしくお願ひします

では本編へどうぞ

1・美奈にララバイ

「メールしてよね」

「うそ」

「電話もしてよね。」

「うん」

田の前で、今にも泣き出しそうな美奈。
そのうるさだ瞳に映る、同じように泣き出しそうな私。

間も無く発車すると、ホームのアナウンスが流れた。

「困ったこととかあつたら、すぐに連絡しろよ」

言いながら、美奈に荷物を渡す拓也。

「おつがとつ」

美奈は、ゆっくりと電車へと乗り込んだ。

「一人も、また遊びに来てね」

「うさ、絶対行くから」

私の言葉に、安心したように美奈は田を少し細めた。

「元氣でね」

「シュー」という音をたてて、電車の扉が閉まった。

美奈と私達を隔てるよつこじで。

「… 美奈…」

走り出す電車を追い掛けようとした私を、拓也が腕を掴んで止めた。

「美奈ー。」

行ってしまった幼馴染み。

別れの最後は、美奈の優しい笑顔だった。

「いい加減泣き止めよ」

駅の近くにあるファーストフード店。
その禁煙席の隅の席で、私と拓也は向かって並んで座っている。

「別に一生会えないとかじゃねえんだからさあ

言いながら、ケロリとポテトを一本食べる拓也。

「なんであなたはそんなに平気な顔してんのよ

「なんでって、別に平気なわけじや

「北海道よ？！美奈が北海道に行ひやつたのよ？！」

「やつだな

「そりだなつて…幼馴染みがそんな遠くに行ひやつて寂しくないわけ？！最低…」の薄情者…」

一通りけなしてやつて、またわーんと汗のよつこ泣き始める。

そんな私を、困ったよつて見る拓也。

そう。

私達は幼馴染みなのだ。

私、富崎尚美と、今田の前でポテトを食べている木高拓也。
そして、北海道へ行つてしまつた笹塚美奈。

小学校からいつも一緒に。

それが当たり前だった。

勿論これからもそうだと思つてた。

それなのに。

未来なんて、ほんと何が起こるか分からない。

「尚美」

「…なによ」

「そんなデカイ声で泣いたら田立つ」

「なつ…」

に言つてんのよ!つて怒鳴りつとしたけど、周りからの迷惑そつな
視線に気が付いて、その言葉をぐつと呑み込んだ。

「尚美」

「もうせつといで」

「ハンカチ」

言われて顔を上げると、拓也が紺のハンカチを差し出した。

「尚美にはまだ俺がいるだろ」

「ふん」

拓也のクサイ言葉を鼻息で吹き飛ばして、ハンカチを受け取る。

「たく。可愛くねえの」

呆れたよつこ少し笑つて、拓也はまたポテトに手を伸ばした。

わたしはその言葉に少しイラつとして、拓也のハンカチで思いきり鼻をかんでやつた。

2・一人のベクトル

2・一人のベクトル

「え、なんでこうなんの?」

「だーかーらー、さつきも言つただろ?このベクトルとこのベクトルが平行だから…」

拓也の示す平行四辺形は、何度もシャーペンでなぞつたりしているため、もう原形がわからないくらい真っ黒になっていた。

只今、放課後の教室で昨日返ってきた数学のテストのやり直し中。

教えてもらっているのは私。

教えているのは拓也。

拓也は何故か数学ができる。

あと化学と物理も。

でも、社会とか国語とかできないから、典型的な理系頭なんだ。

私はと「うと。

拓也とは真逆な文系頭だつたりする。

だから数学なんかは大嫌いなわけで。

今数学のテストをやり直しているのも、点数があまりに悪かつたため、単位を落とさないよう先生が考えてくれた応急処置だつた。

「あーーーもつ、分かんないーー！」

「しつかり考えれば分かる」

「てかね、なんでベクトルとかしなきや いけないわけ？！人生に矢印なんて必要ないでしょ？！」

「尚美。 それ、屁理屈」

「屁理屈じゃないもん。 本当のことだもん」

「せり、つまらない」と言つたな。 もうやめや。

「 もうやだー。 疲れたー」

言いながら、私は机の上に突つ伏した。

「 尚美」

「 私の人生には、平行四辺形も四面体も必要ないもーん」

なおも起き上がりない私を見て、拓也は呆れたよつたため息を吐いた。

「 たく。 そんなことばっか言ついたら、美奈に愛想つかわれるや」

「 …」

「 今は遠くにいるけど、お前も少しは美奈を見習えよ」

「 …」

美奈は、数学は得意じゃないっていつも言っていた。

だけど、テストでは理系の子に負けないくらい、いつも上位で。

美奈は、数学が嫌いだとも言っていた。

でも、毎日自分から数学を勉強してて。

何に対しても、美奈は一生懸命だった。

『尚美、一緒に頑張りつつ、一生懸命やつたら、失敗してもきっと後悔なんかしないと思つの』

私が何かを諦めようとする度に、美奈は笑つてそう言つてくれたつけ。

私は、無言で起き上がると、ノートの上に転がっていたシャーペンを手に取つた。

「…数学、がんばる」

「ん」

「嫌いだけど」

「知ってるって」

「ものすごく嫌いだけど」

「はいはい」

「美奈に負けないよ」、元気で頑張つてみる

私の言葉を聞くと、拓也は優しく笑つた。

「よし、じゃあ次の問題やるか」

「あ、ちょっと待つて」

拓也もシャーペンを握り直して「ああやうつー」という時に、私のストップがかかり、拓也は少し不思議そうに顔を傾げた。

「どうしたんだよ？」

「私、がんばる」

「？それはもう分かったって」

「だから、拓也も頑張って」

「は？」

怪訝な顔をする拓也をよそに、私はテストの問題用紙の半分の折り田に沿って、軽くシャーペンで線を引いた。

「うーから」」までは私も考えるから、あの問題は拓也がやってよ

「…」

ナイスアイディアでしょと笑う私の頭を、拓也がパソコンと呟いたのは言つまでもない。

3. オハヨー話のよひ

近くに美味しいケーキ屋さんができたとか。

今、女子の間ではちよつぴり人気なその話題。

ま、私も一応女子なんで？

興味無いと嫌がる拓也を無理矢理その店の前まで引きずりつれて、
今に至る。

「やーん！ かなり可愛くなーい？ ーー」のむ西ー

「……」

田の前の小柄なその店は、まるでおお餅で出来てゐる様な、黄色と
ピンクを基調にした、なんともメルヘンチックな建物だった。

「やー、入るわよー。」

「ちよーーーだーーー」

拓也を腕を引いて中に入ろうとした私を、拓也の抵抗が元の場所に引き戻す。

「は？何言つてんのよ、今更」

「今更もくそも、俺の意見は完璧無視だつたじやねえかよ！」

「何よ！人を自己中のな言い方して！」

「いや、そのまんまだから」

そのあと少し言い争つて、最終的にジャンケンで勝つた方の意見を優先することになった。

「負けても文句無しだからね」

「うちの台詞だつての」

お互い、右手に全ての氣を集中せらる。

「さいしょはグー！」

「さいしょつから！」

ここで綺麗に勝ち負けが決まる。

馬鹿正直に出されたグーと、私のパー。

「尚美！汚えぞ！」

「ふん。 なんとでもお言いなさい、ミスターピーマン」

まさか今時こんな初步的な罵に引っ掛かるとは。

ジャンケンが全てグーから始まると思ったたら大間違いよ。

「あ、入りましょ？」

私はがつちつと拓也の腕を掴んで、店の中へと入った。

「こりゃしゃいませえ」

ドアに付けられた鈴がチリンと鳴ると、可愛いらしくメイド風な制服に身を包んだ店員達が一斉に私達に笑顔を向けた。

「一々様ですか?」

「あ、はい」

「店内全席禁煙となつておりますので、ご協力よろしくお願ひします。では、ご案内致しますね」

にっこりと愛想の良い店員は、奥の一人用の小さめのテーブルへと私達を案内した。

私達が椅子に座ると、手に持っていたメニューをテーブルの上に広げた。

「いらっしゃが、当店で一番人気のフルーツタルトとお紅茶のセットになります」

店員が指差したページには、色とりどりの果実が並べられた、美味しいやうなケーキの写真が。

「じゃあ、私これトモー」

「俺も」

「フルーツタルトセットねーいつどよろこびですか?」

「はい。お願ひします」

「かしこまつました」

店員は「ううう」と笑うと、メニューを下げる、厨房の方へと戻つていった。

「この店、ちよつと気に入つたかも」

「なによ、いきなり。わざわざあんなに入るの嫌がつてたのに」

私の言葉を右耳から左耳へと聞き流し、拓也は厨房の方をやけにに

やけて見ている。

「だつてさー」

その伸びた鼻の下から、だいたい言いたいことは予想がついた。

「いーの店員… いーの店員…」

「お前はどこのスケベオヤジだつー！」

つねりあげた拓也の頬を、せりこみよーんとひきぱつてからぱつと手を離した。

「ーつー… いってーな、この暴力女… いや、もはや尚美はもう女じやないな」

「なんですかー？ー」

また私が拓也の頬をつねりあげようとした時、ケーキと紅茶の乗つたオボンを持った店員が私達のテーブルへと歩いてきた。

「お待たせしました。フルーツタルトセグトでござります」

言いながら店員がテーブルの上にフルーツタルトと紅茶を並べていく。

「あの、お客様」

「あ、はい」

いきなり話し掛けられ、少しビックリする。

「お客様はカップルでしょうか？」

「は、はい？！」

な、なにを言い出すんだ、この店員は？！

「失礼いたしました。実は今、オープン記念として、カップルのお客様限定にこちらのキーホルダーをプレゼントさせて頂いているんです」

店員は言いながらエプロンのポケットから一つのキーホルダーを取り出した。

それはよくある、一つのハートを二つに分けたもので、その真ん中
にこの店のロゴが小さく描かれていた。

「あー私達カップルじゃ」

「俺たち恋人同士です」

「え?...」

拓也の言葉に耳を疑つ。

「ちつですかーでは、こちらをどうぞ」

そのキー ホルダーが一つずつ前に置かれた。

「ありがとうございます」

爽やかに笑う拓也。

私はとこうと、まだ今の状況を呑み込めずにいた。

「では、『ちつともりんご』」

店員はヒツヒツと笑ひ、また厨房の方へと戻つていった。

「ちゅ、ちゅうと、拓也ー。」

「ん？ なんだよ？」

「なんだよじやないわよー。私達カップルじや」

「なにお前」だわつかやつてんだよー。」

「え？」

「貰えるもん貰ひとかなきや 捻だい」

「…」

なにそれ。

「…拓也」

「ん? なんか言つたか?」

「べつにーーー」

おもしろいやうに笑う拓也。

私は構わずフルーツタルトにフォークを突き刺した。

「「」なん」とで動搖するなんて。尚美も可愛いといはあるじやん」

そう言いながら私を見て微笑む拓也の顔を、何故か直視できなくて。

そのあと食べたフルーツタルトの味なんて、もつほとんど分からなかつた。

4・夢と落書き

4・夢と落書き

三時間目、窓の外からは心地好い光が降り注ぎ、私は窓際の一番後ろの席で、激しく睡魔に襲われていた。

今は日本史で、つまらないかぎり怒られなことこのこともある。

真っ白なノートがやけに眩しくて。

私はゆっくりと机に突っ伏した。

「メールしてよね」

「ああ」

「電話もしてよ?」

「わかつてゐよ」

拓也の手には、大きな荷物。

美奈の田からは、涙が今にも溢れだしてしまった。

私は何も言つことなく、ただ横からその光景を見ていた。

間も無く発車すると、ホームのアナウンスが流れた。

「困ったことがあつたら絶対連絡してね

「ありがと。一人もこっちに遊びに来いよな

言いながら、拓也はゆっくりと電車へと乗り込んだ。

「うん！絶対行くから」

美奈のその言葉に、拓也は安心したように田を細めた。

それを見た美奈が「ひびくつと向く。

「尚美！尚美も何か言いなよー。もうすぐ拓也遠くに行っちゃうんだ
よー。」

拓也が遠くに行く。

それがどうのことなのか、なんとなくだけ分かる。

もう、会えなくなるんだって。

でも、私は何も言ひことができなくて。

「尚美ー。」

美奈の急かす声が耳を貫く。

そんな美奈を、拓也は静かになだめて。

「尚美、美奈と仲良くじゅよ」

拓也は優しく私の頭を撫でた。

「じゃあ、元氣でな」

プシューといつ音をたてて、電車の扉が閉まった。

「拓也…」

私の口から出たのは、本当に情けないくらい弱々しいもので。

「拓也…」

私は必死で、走り出したその電車を追い掛けた。

「尚美…」

後ろから、美奈が呼ぶ声が聞こえる。

それでも私は走り続けて。

「尚美…」

拓也、行かないで。

「尚美…尚美…」

私を、置いていかないで。

「尚美…」

「…尚美…尚美つてば…」

「…ん」

呼ぶ声に目を開けると、前の席の友達が私の腕を軽く揺すつていた。

「もーー起こしても全然起きないんだから。もう四時間目始まるよ

「え」

慌てて体を起しそうと、教壇には日本史の先生ではなく、現国の先生が立つていて。

チャイム、全然気が付かなかつた。

「…あれ？ 尚美、泣いてるの？」

「え？」

言われて頬を触ると、確かに少し濡れていた。

「どうしたの？ 怖い夢でも見た？」

「…うん。 そうみたい」

起こしてくれてありがとうとお礼を言つと、友達は軽く笑つて前を向いた。

怖い夢？

今見ていた夢を、まつきつと思いつ出せない。

でも、なんだかひどく寂しい夢だつた氣がある。

泣いてしまつくらい、悲しい夢だつたような氣がある。

私は涙を拭い、現国の中学生に集中しようと、広げっぱなしになつた日本史のノートを閉じよつとした。

が。

「…」

真つ白だつたそのノートには、可愛らしく「うちやんが右のページいっぱいに大きく描かれていて。

あは。
なに、このウーッちゃん。

大体犯人は予想がついたが、今は授業中。

黙つてそれを消そうと消ゴムを手にしたとき、ふと視界ギリギリのところで私を見て笑つてゐる奴の姿が目に入り。

拓也も一番後ろの席で。

私と拓也の間には、二つの机を挟んでいるが。

そんなこと構わずに、私は手に持つてゐた消ゴムを拓也のおでこに向かつて思い切りなげてやつた。

「いってえ！」

み「ことそれが的に命中し、拓也が少し大きめの声を出す。

「木高くんー何騒いでるの?！」

そして黒板を書いていた現国の先生に怒られる拓也。

「ふん。いいきみ。

「違うつて先生ー尚美が消ゴム投げてきたんだよー。」

「なつー。」

いきなり名前をあげられ、びっくりして立ち上がる。

「拓也がノートにおつかへウ ノなんか描くからでしょ?ー。」

私の言葉に拓也も立ち上がった。

「は?ー。そつちがグースカ寝てるから悪いんだろー。」

「寝てるからって女の子のノートにウン なんか描く?普通!高校生にもなって恥ずかしい。小学生かつつーのー。」

「ふん!誰が女の子ですかー?女の子はなあ、そんなデッカイ声でウ ノつて連発したりしませんー!」

「はあ?ーなんですかー」

「バン!」

大きな音が突然響き、ピタリと喧嘩をやめる拓也と私。

前を見ると、教卓に手をついて現国の先生がワナワナ震えていた（たぶん怒りで）。

やばいな、こりや。

「木高くんに、富崎さん。二人とも、廊下に立つてなさい」

「…はい」

二人同時に返事の声を絞りだし、ゆっくりと廊下へと出た。

「あーあ、怒られちゃつた」

私は壁にもたれながら言った。

「あんなキレイな先生にいいのになー、あの先生。だからいくつになつても結婚できないんだよってね」

「先生に聞こえるよー？」

「聞けえねえよ」

笑いながら拓也が言った。

私達以外は誰もいない、静かな廊下。

窓から入ってくる光は、やつぱり心地の良い眩しさで。

なんだかこのまま、拓也とななら死んでもいいかな、なんて思った。

「ねえ、拓也」

「ん？」

「わっ あは」めんね

「いいよ。俺も悪かったかもしれないし？」

「うわ、なにそれ」

二人、壁にもたれて笑う。

その時に軽くお互いの手が触れて。

どちらからともなく、手を繋いだ。

それはなんだか懐かしい感覚で。

「手、あつたかい」

まだ少し肌寒い五月。

ずっとここにあって一緒にいられたらいなあなんて。

そんなふうに思つた。

5・重低音に酔いながら

5・重低音に酔いながら

「最近遊んでないねー」

といつ、亜里沙の一言で。

国本亜理沙、中間裕子、仲川俊、西田浩介、拓也、そして私の六人で、放課後カラオケに行くことになった。

実はこのメンバー、結構頻繁に遊んだりするくらい仲良しだったりする。

「よつしゃーーーうたばーーー！」

部屋に案内されるなり、仲川と西田は手際よく曲を予約していく。

「一番ーー仲川俊ーー！ポルノつたいまーすー！」

マイクを手にした仲川のそのおかしな言い方に、亞理沙と裕子が爆笑する。

画面に曲のタイトルが映り、あのアップテンポな重低音の効いたインターロが流れ出す。

久しぶりのカラオケ。

テストも終つて、みんなのテンションは急上昇。

歌いだした仲川の、ひどく狂つた音程に、再び全員が声をあげて笑う。

拓也も、ウーロン茶を飲みながら笑つていて。

狭く薄暗い部屋中に響くビートが、心地よく体全身に響いた。

「なーおみー」

それから全員が何曲か歌つて、再び男子たちが175Rを熱唱して

いた時。

不意に隣に座つて来た裕子に話しかけられる。

「ん？」

「尚美はさあ、正直あの三人の男子の中でもラソンクをつけるな」ビタ
つける？」

「はあ？」

急におかしな質問をされ、困ったよつて笑う。

「どうしたのよ、いきなり」

「いいからー」

「えー」

とか話しているうちに、亞理沙も加わり、完全に男子と女子に分か
れてしまった。

「んー、三人とも同じようなもんじゃない？」

「そう？私は違うなー」

「うん。私も」

私の答えに異議を唱える一人。

「え、じゃあ一人はどうなのよ

てか。

なんでクラスの男子の品定めしてるんだる、私たち。

「えー」

「言つたら尚美絶対怒るもーん」

「なんで私が怒るのよ

話の流れが、うまくつかめない。

「怒らない？」

「うそ」

「絶対、怒らない？」

「怒らないってば」

「一人のタイプ聞いて、なんで私が怒るのよ。」

「仲川と西田はおことこでー」

「うそ」

「木崎がやつぱりダンストラだねって思つわけー」

「私もやつ思いまーすー。」

「。。。

「・・・わつ？」

「わつだよー。」

「木高がつかのクラスでは一番人気なんだよー。」

そんな話、初めて聞いたんですけど。

「でもわ。拓也あんまり皆ととかれてるの見たことないよ」

ラブレターとか、恋愛のれの字も聞いたことが無い。

「もーー尚美は鈍いなー！」

「なにがよ？」

「そ、れ、はー尚美がいるからだよー。」

「はい？」

意味が、わからない。

私がいるから、どうして拓也が昨日わざわざこいつに繋がるのか。

「嘘ね、尚美と木高が『テキてる』て思つたりやつてるわけ

「はあー?」

思わず素つ頼狂な声を上げる。

拓也と私が、『テキてる』ですって……?

「・・・・ありえないからー」

「知つてるよ。『ひひひひひひ』尚美たちが付き合つてない」とせ

「え、じゃあ

「でも、他のクラスの子たちが知らないだけ

いや、訂正してぐだわー。

「嘘の田には、尚美と木高はもはや夫婦として映つてるんだよ

そんなこと、初めて知ったんですけど。

拓也と私が、そんな風に思われていたなんて。

「なーに話してんの」

歌い終わった男子たちが、私達三人を挟むようにそれぞれ座る。

裕子を真ん中にして座っていた為、私は女子の中では端っこで。

私の隣には、当たり前のように拓也が座った。

「内緒ー」

亞理沙が言いながらホワイトウォーターのグラスの氷をストローでつつつく。

「えー気になるじゃーん！」

ちやつかり亞理沙の隣をゲットしているのは仲川。

実は仲川は亞理沙に密かに想いを寄せているようだ。

それを知らないのは亞理沙だけといつのが、悲しい現実だつたりする。

「尚美、何話してたんだよ」

拓也も少し気になるようだ。

「だからー、内緒つて言つたでしょ？」

教えない。

てか、教えられない。

「ちえ。ケチくせー」

すねたように唇を尖らせた拓也は、近くにあつたウーロン茶を手に取り、ストローをくわえた。

「あ」

ストローをくわえたまま少し考えるよつに固まつた拓也。

「どうしたのよ？」

「……これ、俺のじゃない」

「え？」

「そついえば俺、さつきウーロン茶は飲み干して、メロンソーダ注文したんだつた」

「……」

ウーロン茶を最初注文したのは、拓也と私の二人だけ。

その後でウーロン茶を注文した人は確かいなかつたから……。

「それ私の！」

急いで拓也の手からグラスを取り返す。

「なんだ、尚美のか。よかつた」

「よ、よ、よ、よくない！」

変に安堵する拓也とは対称的にひどく慌てる私。

「なに動搖してんだよ？てか…お前顔赤くない？」

言いながら、私の頬に触れようと、拓也が手を伸ばしてくる。

心配そうな拓也の顔が、間近に見えて。

手が、かすかに頬に触れた。

「あやつー！」

パシン。

私は気付くと、拓也のその手を払い退けていた。

「あ……」

田の前には、驚いた拓也の顔があつて。

「た……体調悪いみたいで……悪いけど今日は帰るわ」

私はそう言つなり、財布から千円札を三枚抜き取ると、それをテープルの上に置いて走つて部屋を出た。

私、どうかしてる。

『木高がうちのクラスでは一番人気なんだよ』

二人が、変なこと言つから。

『尚美と木高がテキてるって思つちゃつてるわけ』

そんなこと、ありえないのに。

絶対に、ありえないのに。

『尚美と木高はもはや夫婦として映つてるんだよ』

なのにどうして？

なんで私、こんなにエキアキしてるの？

6・蟻は壺の中で

6・蟻は壺の中で

カラオケでのことが気になつて、夜にお風呂の中になんとなく考えた。

拓也と私の関係。

考えたつて、どうにかなるわけないの。

そつ分かつていても、頭の中はそのことで一杯だったから。

少し熱めのお湯の中で。

白い蒸気に包まれながら。

そしたら知らない間に寝つてしまつたらしくて。

「ふえりへー。」

自分の大きなくしゃみで田を覚ます。

もつすぐ夏だとこのに風邪をひきました。

「鼻水でぬい」

枕元に置いてあるティッシュを一枚とり、ぶーっと思いきり鼻をかむ。

「ミニ箱にそのティッシュを捨てる時に、ふと時計を見ると、もう夕方の四時を軽く過ぎていた。

共働きの母が用意してくれた昼食を食べたのが十一時半。その後すぐに寝たから、三時間は寝ていたことになる。

「もつ学校終わつたかなあ」

段々と長くなる毎に、まだ窓の外は明るくて。

いつもなら、今頃拓也と帰り道を歩いている頃。

今日は、拓也は誰とあの道を歩いているんだろう。

『木高がうちのクラスでは一番人気なんだよ』

昨日の裕子の声が頭をよぎる。

今日は私がいない分、拓也の隣はフリーなわけで。

私がぐうすか寝ている間にも、もしかしたら何人かが拓也にアプローチしていたかもしれない。

「…って何考へてるんだ、私

やつぱり昨日から、どうも調子がおかしい。

拓也がどんな女の子と仲良くしたって、そんなこと私には関係ないじゃない。

テストもあつたし。

疲れてるのかな、私。

わつ一眠つしよつと横になりかけたとき、

ピーンポーン。

機械的なチャイムの音が私しかいない家の中に響き、誰かの訪問を知らせた。

誰だよ、こんな日に。
出たくないな。

髪はセットしていなからボサボサだし、服だつてヨレヨレのロン
グーツシャツにジャージつていう、女子高生にあるまじき姿。

ええい、いいやー。
無視しよおつと。

びつせ新聞の勧誘が何かでしょ。

そう決心して布団の中に潜り込む。

再び目を閉じた。

が。

ピンポーンピンポーン！

「…」

ピンポーンピンポーンピンポーン！

「…」

何度も鳴りたれるチャイム。

めじやくじや怖いんですけバ。

ピンポーン。

最後に一回鳴ったのを聞いて、私は仕方なく立ち上がり玄関へと向かつた。

つかけを足にひっかけて、ガチャリとドアを開ける。

「 よお 」

そこには、ケーキの箱を手にした拓也が、いつもの笑顔で立っていた。

拓也を家に入れ、私の部屋へと案内する。

「 ちよつと待つて。今何か飲み物持つてくるから 」

「 あーいーつて。コンビニで午後ティも買ってきたからそ 」

ケーキの箱の陰になつて見えなかつたけど、小さなコンビニの袋もあることに気が付いて。

そんなどこにも、拓也の気遣いが感じられた。

でも結局お皿とフォークは取りに行かなきゃ駄目だったけどね。

「てかお前居留守使おつとしただろ」

ケーキをつつきながら拓也が言った。

拓也が買つてくれたケーキは、この前一緒に食べに行つたあの店のものだつた。

「そ、そんなことないよ」

「出るの遅すぎだし

「仕方ないでしょ？！こんな格好じゃ」

「ふーん。やつぱり留守使おつとしたんだ」

勝ち誇つたように、拓也は口の橋を上げる。

「だつて…ジャージだし、髪だつてボサボサだし」

言いながら、私は所々撥ねたままの髪を撫でつけた。

「ふつ。尚美でもそこいつの氣にするんだ？」

「なつ…どーいつ意味よお?…」

「別にいー」

言いながら、拓也は大きく口を開けて、残りのケーキをペロリと呑み込んだ。

「尚美は、どんな格好でも可愛いと思つけど。俺は」

「?！」

いきなりの拓也の言葉に、顔が熱くなるのを感じた。

「尚美茹で蛸ー」

そんな私を見て、面白そつに笑つ拓也。

「なつ！拓也がこきなり変なこと言つからでしょ？ー。」

とか一応反抗してみるもの、それはなんの効果ももつていなくて。

「つーでー。」

ちょっと悔しかったので、ニヤニヤと笑い続ける拓也にド「ロレンを一発お見舞いしてやつた。

「…いつてー。暴力反対！」

おでこを撫でながら涙田で抗議してくる拓也。

「ふんー。」

そして、まだ顔の熱は治まらない私。

でもなんとかこの場は上手くやりす“”じた。

駄目だ私。

完全に拓也にペース狂わされてる。

その後、今日の授業の内容とか課題とか、ありきたりな話を結構して。

気が付くと口がすっかり落ちてしまっていた。

「じゃあそろそろ帰るわ」

言いながら立ち上がった拓也を玄関まで見送る。

拓也の家はすぐ向かいにあるから、もう少し長くいても大丈夫なんだけど。

遅くなりすぎると迷惑をかけるかもしれないという、拓也なりの礼儀なのだ。

ドアを開けると、暗い中で切れかけの街灯がパチパチとしているのがやけに丑についた。

「明日は学校行くから」

「ねい。 やつは、お前がいねえとつまんねえし」

「ドアを開けながら一カツと笑う拓也、「私は本日一度田の茹で鰯になつた。」

「あ、鍵、ちゃんと閉めとけよ」

「え、あ、う、うさ。 わかりしるー。」

私、力ないや。

「今日は本当にうまい。 ケーキもすくべ美味しかった」

「あ、そうだ」

私の言葉に、拓也は何か思つ出したようにまた私に向を直つた。

「ケーキ、柴山にも禮言つとこい」

「え?」

「なんで」「」柴山さんの名前が？

「あのケーキ、柴山も一緒に選んでくれたんだよ。だからセ

え。それって…

「拓也、今日柴山さんと一緒に帰ったの？」

無意識の内に口に出た疑問。

言つてから後悔しても、もう遅い。

「まあな。柴山から誘つてくれたからさ

全く嫌な素振りを見せない拓也。

「じゃ、また明日な

何か言つ代わりに、私は軽く手を振つて拓也を見送つた。

バタンと、やけに大きな音を立てて閉まるドア。

『柴山から誘つてくれたからさ』

普通に話す拓也にとっては、多分それは何でもないこと。

だけど

私はこの時、何故かすごく嫌な予感がした。

7 牝牛の誘惑

7・牝牛の誘惑

「なーおーみー」

教室に入るやいなや、バッヂリメイクの裕子と亞理沙が近寄ってきた。

「昨日風邪だつてえ? 大丈夫?」

「ん、まね」

心配そうに聞いてくる亞理沙。

「カラオケでハッスルしそうだんじゃないの?」

と、亞理沙とは対称的に茶化す裕子。

一日休んだ学校。

当たり前だけど、一昨日と何ら変わりはない。

拓也とは、下校は一緒にしているけれど、登校は別々の方が多い。

朝の待ち合わせって、何故か上手くいかないのだ。

だから今日も例外ではなく、私は一人で教室に入った。

「隣のクラスに聞いたんだけどさ、今日数学で抜き打ちテストがあるらしいよ」

裕子が思い出したように言つ。

「えー、まだ?」

「数列の公式チェックらしい」

「最悪」

亜理沙も私も。

数学は大嫌いだから悲痛な声をあげた。

何気無い、ありきたりな、いつも通りの会話。
あと少しで朝礼が始まる。

一日しか休んでないんだもん。
何も変わつてたりなんかしない。

ふと、そんなことを言い聞かせている自分に気がつく。
まだ、本調子じゃないのかな。

その時だった。

「えー！拓也くんって超可愛いー！」

嫌でも耳に入つてきた、色氣付いたあの猫撫で声。

声の方に私たちは顔を向けた。

そこには、拓也と、拓也の腕に抱きついて腕を絡ませた柴山さんが、楽しそうに話しながら教室に入つてきていた。

「…柴山」

眩いた裕子の声は、何処か毒氣を含んでいる。

「そうだ、尚美」

亞理沙が声を落として私を呼んだ。

「昨日も、尚美いなかつたでしょ」

「ん

「そしたら、柴山さんが

その次は大体予想ができた。

「木高に結構積極的に接近してたんだよね

亞理沙に、裕子も頷く。

「モーモー。しかも昨日の今日で、わづ『拓也へん』だしね。」

裕子は言しながら、睨んでくるとも言えるような強烈な視線を、拓也と柴山さんへ送った。

拓也と柴山さんは、まだ一人で楽しそうに話していた。

「…そつか」

その時、柴山さんが拓也にギュッと抱きついて。それを見た途端何故か胸がチクつて痛んだ気がして、思わず目を反らした。

「尚美…」

キーンゴーンカーンゴーン。

裕子が何か言おうとしたが、同時にチャイムが鳴り、私はまた後でとだけ言つて、自分の席についた。

「よつ。調子いいよ」

ポンと私の頭に手を置いて、拓也が聞いてきた。

今日初めて交す会話。

それは、柴山さととのようち後の中だ。

頭に置かれた手を、軽く叩いた。

「尚美？」

少し驚いたような拓也の声。

「……調子はどうかって？」

私はゆっくりと拓也の方を向く。

「お陰さまです。もう最悪よ」

多分私は、今物凄く機嫌の悪そうな顔をしている。

先生が入って来て、拓也は渋々自分の席に戻つていった。

柴山真理子。

ミルクティ色の長い髪を弛く巻いて、真っ赤なリボンで一つに結つているその姿は、まさにプリンセス。

学年一の巨乳とは彼女のこと。

遊んだ男は数知れず。

その大きな胸に泣かされた馬鹿犬どもも数知れずだ。

飯より友よりまず男。

柴山さんとは、そういう女の子だ。

そんな彼女を快く思つていらない女子は、多分かなりいる。

亞理沙も私も、あまり好きじゃないけど、裕子は好きじゃないなんてもんじゃない。

裕子は、以前彼氏を柴山さんに盗られたことがあるのだ。

ちょっと喧嘩をしている間に、柴山さんは上手く裕子の彼氏を寝盗つたらしい。

まあ彼氏の方も浮気癖があつたのかもしれないけど。

その時の裕子は、もう見てこむつも辛くなるへりシヨックを受けていた。

色を抜いた赤い髪と、常に完璧な化粧という、少し派手めな裕子の外見からは想像もできないほど、彼女はめちゃくちゃ純だつたりする。

だから裕子は、別れた後も、なかなか彼氏の携帯のアドレスを削除できなかつたらしい。

これはあくまでも、私の推測に過ぎないけど。

もしかすると、今でもその彼氏を忘れられずにいるのかもしれない。

そして。

柴山さんに對しての恨み。

それはあの時から少しも薄らいでいないことだけは確か。

裕子と柴山さん。

二人はまさに、犬と猿。

一人の仲が修復する日は、たぶんずっと来ないような気がする。

「尚美」

呼ばれて我に帰ると、音楽の用意を手にした裕子と亞理沙が立っていた。

「朝礼、もう終わってるよ?しかも次、時間割変更で音楽だから移動だし」

「ぼーっとしちゃって。大丈夫?」

前の壁に掛けてある時計を見ると、あと一、二分で一時間目が始まろうとしていた。

「『』めん、先に…」

「拓也くん！急がないと遅刻だよお？」

聞きたくないあの猫撫で声。

拓也くんって言葉にどうしても反応してしまつ私は、多分病み上
がりだからだと思いたい。

「柴山。別に先に行つてくれていいから。遅刻しちゃ悪いし」

大半が出ていつた後の人の少ない教室に、拓也の声が響く。

「嫌だ嫌だ。マリは拓也くんと行きたいのよ」

因みに、マリってのは柴山わんの自称。

自分の『』とを名前で呼ぶあたり、かなりキテると思つんだけど。

何故かそれに男子は引っ掛けちゃうんだよね。

だから、まじ。

「拓也くん、マツと一緒にどこへ

「…はいはい

拓也だつて例外じゃないでしょ。

朝礼が始まる前と同じように、柴山さんは拓也の腕に自分の腕を絡ませて、教室から出ていった。

「…尚美」

「ほら、一人ともー私たちも早く音楽室行こうー！」

何か言いかけた亞理沙を、私の無駄に明るい声が遮る。

心配そうに顔を見合わす二人の腕を引っ張つて、私は教室を出た。

何も気にしていないよつて、いつも通りの笑顔を張り付けて。

そうだよ。

実際、拓也と柴田さんと一緒にいたって、そんなこと私には関係ない」とじやない。

『尚美と木高が「ネキ」ひるつて黙つちゃつてゐるわけ』

皆、間違つてゐる。

勘違いもいといひ。

拓也は、私の幼馴染み。

私は、拓也の幼馴染み。

ただそれだけ。

それ以上でも、以下でもない。

拓也と私が「テキ」ひるなんて。

そんなこと、あるわけないじやない。

8・ありがとうパンダ

8・ありがとうパンダ

先生がさよならを言つて、皆それぞれ動き出した。

放課後の掃除当番にあたっている人たち以外は、わいわい喋りながら靴箱へと向かう。

いつもと変わらない、平和な放課後。

拓也も私も掃除当番には当たっていなかつたから、すんなりと下校できる。

いや。

できる筈だったのに。

「なあ、尚美。今日柴山も一緒にいい?」

これは、靴を履き終わった拓也の言葉。

「は？」

私も脱いだ上履きを靴箱の中にしまって顔をあげると、拓也の隣には、また拓也の腕に抱きつぶよつに自分の腕を絡ませている柴山さんが。

「マリも一緒に帰つていいよな？ 柴山さん」

ほんと、憎りしきりい可愛い笑顔で、柴山さんは言つた。

「え…柴山さん、方向逆じやない？」

「あー、なんか今日は用事で電車乗るんだって。だから駅まで。な、
柴山」

「うんー！ 拓也くんの言つ通りでーすー！」

私の必死の抵抗も、いとも簡単にかわされて、もう断るなんてできない状況。

拓也の家も私の家も、駅前の道を真っ直ぐ行った住宅街にあるから、

柴山さんが駅に行くななら断る理由なんて」おまけも無いなるか
い。

ま、私の感情を除いてですけど。

て、いうが、拓也、なに柴山さんの代わりに説明とかしちゃつてるわ
け？！

本当、男の子ってこれだから嫌だ。

「…いよいよ駅まで一緒に帰る」

私は、柴山さんと皿を合わせたてついた。

「拓也くんって手大きいよねえー！」

「え、そりか？別に普通だと思ひナビ…」

「大きいよ！ マリの手小さいから余計そう感じちゃうのかな。ほら手貸してみて」

言いながら、柴山さんは拓也の手を取り、その掌と自分の掌を合わせた。

わのせかひのくのうじの體子。

私の前でイチャイチャしないで欲しいんですけど。

私はと言つと。

一人の少し後ろを歩いている。

ちょうど三人が一等辺三角形になるような感じ。

まあ言つまでもなく、頂点は私なんですけど。

「あーー見て見てーー」のクッショングループ超可愛いー。」

柴山さんの顔で、駅まであと少しの所にある雑貨屋さんの前で立ち止まつた。

「学校の近くにこんな可愛いお店があつたなんて、マリ全然しらな

かつたあ

雑貨屋さんのショーウィンドウに張り付いて、そこで飾られている
ハート型のパシシヨンピンクのクッション – 田惣れした様子の柴
山さん。

「ねえ、拓也くん。マコ、ちゅうといのお店の中見てこきたいなあ

「え…」

少し困ったような顔を出したのは私。

この状況から早く解放されたかつたのに。

「でも柴山さん、用事…」

言いかけた私を、柴山さんはキッと睨んできた。

余計な」と叫わないで。

その視線は、痛いほどに私の胸元に這ってきて止まらなかった。

「柴山が大丈夫なら、俺たちは別に構わないけど。なあ、尚美」

「…うん」

私は渋々頷いた。

「わーい」

私たちの返事を聞くと、さつきの睨みは見間違いだったのかと思うくらい無邪気な笑顔で、柴山さんは拓也の腕に抱きつきながら店内へと入っていった。

私も、少し遅れて中に入る。

店内はお世話にも広いとは言えなかつた。

狭い通路を挟み込むよつとして、商品の飾られている棚が並べられている。

実際、この店に入るのは、私も今回が初めてだつた。

早口な何処かの国のロックが流れていって。

所々に設置された鏡には、情けない顔をした横顔が、やつぱり情けなく映った。

「拓也くん、見て。このペンかなり可愛いない？」

「あ、本當だ。気に入ったんなら買えれば。柴田に会つて、

「えー本当に? どうしよう。拓也くんがそういう言つてくれるんだったら買つちゃおつかなあ」

一人の楽しそうな会話が聞こえてくる度に、私の口からはため息が漏れる。

はあ。

何やつてるんだろ、私。

なんで、こんな気分になつたやつんだろ。

田の前に並べられたパンダのぬいぐるみ。

何故かそのぬいぐるみには立派な眉毛が付けられていて。

「私も間抜けだけど、あんたも相当間抜けね」

ボソリと呟いて、軽くその頭をついついてやった。

てか誰だよ。

ぬいぐるみに眉毛つけようなんて考えた奴。

完全にふざけて作ったんだろうな。

そう思ふと、なんだかちょっと可哀想になつて、次は優しく頭を撫でてあげた。

「尚美、帰るぞ」

ふいに拓也の呼ぶ声がして。

「あ、はーい」

私はそのままぐるみに「またね」と言つて、店の出口へと向かった。

店を出ると、柴田さんの手に小さな袋が握られていて。

あのペン、買つたんだなって思った。

その後も、店に入る前同様に三角形になつて歩いて。

相変わらず、頂点は私のままだった。

「あ。俺忘れ物したわ」

もつ駄つて所で、拓也が言った。

「悪いけど、一人とも先帰つて」

「え、ひみつ…」

「じゃ、また明日な」

一人完結して、拓也は踵を返して今歩いてきた道を逆方向に走つて
いった。

残された柴山さんと私。

幸い、もうほとんどの駅に着いていたので、あとせよなりだけを言
えば良いだけだったから助かった。

でも、やつぱり気まずい。

「し、柴山さん……」から電車だよね。私は真っ直ぐだから

「…」

「じゃあ」

「拓也くそと聞かんつてやる」

朝の猫撫で声じゃない、ツンとした声が夕焼け空の下で響いた。

少し驚いて、振り返る。

「おおぐつひるひ尊あるナギ、あれ、デマドシよ~」

「…え？」

突然何を言い出すんだろ？、この人は。

「拓也くんと宮崎さん、付き合ってるの？」

表情の無い、柴山さんの顔。

私は、ただ首を横に振る。

その途端、柴山さんの顔は、勝ち誇ったよつと満面の笑みを浮かべた。

「ほり、やっぱつね！あんなの嘘だと思った。だって、拓也くんと

宮崎もんって、本当笑えるへりこ釣り合つてないんだもん

「…ルーティ、意味？」

「じつこつ意味つて。そのまんまよ。いい？あなたは拓也くんにはふさわしくない。」

長い影がゆらりと動いて。

一本のそれが、かすかに重なる。

「拓也くんは、私がもうつわ」

そういうと、柴山さんは徐々に人の増え出した駅の階段を上つていった。

ぽつんと一人残された私。

ゆつくりと、家に向かって歩き出す。

遠くの空にま、もういくつかの星が輝き始めていて。

自分が、ひどくちっぽけに思えた。

一日休んだだけ。

たつた一日休んだだけで、こんなにも変わってしまうものなのだろうか。

道を歩いていくとかも。

店の中に入るととも。

私はいつも一人で。

少し後ろから着いていくだけで。

拓也の隣にいるのは、私じゃなくて、いつも柴山さんだった。

拓也がどの女の子と仲良くなつが、私には関係ない。

柴田さんと付かれていたことが多かったので、何とも思わない。

だつて。

拓也と私は幼馴染みなんだもん。

だから、全然へっちゃら。

絶対に、へっちゃらだつて、思つてたのに。

なのになんで、私今、こんなに苦しいの？

悲しい？

寂しい？

自分でも、よくわからない。

この気持ちが何なのか、全然わからないよ。

「尚美ーー。」

「……え？」

突然名前を呼ばれて、ぱつと顔を上げる。

後ろを振り返ると、わざと忘れ物を取りに戻ったはずの拓也が走つてきていた。

「……拓也？」

「はあ……はあ……」

私の前まで来ると、拓やは息を整えながら、少し大きめの袋を私に手渡した。

「え、これ」

「それ……お前に……」

「……？」

「いいから、開けろって」

言われて袋のテープを外すと、中に入っていたのは、

「パンダ…」

あの、眉毛のぬいぐるみ。

間抜けなパンダ。

「なんで…」

「だつてお前、店にいるときめちやくちやく気に入つてたじやん

幾分落ち着いた拓也は、少し笑つてそう言つた。

「最後とか大切そうに撫でてたから、どんなに可愛いぬいぐるみか
つて思つたけど。やっぱお前つて趣味悪いのな」

一カツて、からかうよくな拓也の笑顔。

ほとと失礼しなやう。

趣味悪いのはどうしたくせ。

あんな牛女に振り回されたくせ。

「おっ怒つた？」

おかしそうに笑う拓也。一発ガシンと重いしゃくわくと思った。

そり、思ったの。

「ぬ……ごぐる、み……ひく……あつ、が、とあ」

涙ボロボロ流して。

瞬をする度に、止まらないくて。

ずっと柴田さんと一緒にいて。

私なんて、どうでもいいって思われてるんじゃないって。

そんなふうに、考えていたから。

道を歩く時も。

お店にいる時も。

あの絡まる二人の腕を見る度に胸がギュッと痛くなつて。

だからね。

拓也が私のことを見つめると見ててくれたことが、涙が出るほど嬉しかつたの。

「お、おい、尚美？！そんなに傷つけた？俺？！」

私の突然の涙を見て慌てる拓也が、少しだけおかしかつた。

「ねえ…たく、や

「ん？」

「拓也の、隣は…ひっく…もひ、少し…空けて、おいて…」

もひもとんど口が落ちて、かすかな橙だけが、私達を照らしていた。

「お前の隣も、まだ空けとけよ。」

拓也は優しく笑って、私の頭にぽんと手をのせた。

ねえ、拓也。

もしかしたら、私。

あんたのことが好きかもしれない。

9・ピターことひかで

9・ピターことひかで

時計の針は、どちらも十一を指そつとしている。

一時間続きの後半。

一階の端にある、少し広めの調理室では、段々と香ばしい良い匂いが広がっていた。

今回の課題。

ふつくらやわらかフルーツマフィン。

因みにネーミングは先生だから。

マフィンが焼きあがるまでに、同じ班の裕子と並んで、せつせと洗い物を片付けていた。

「シンク掃除はしたくないわ」

排水孔に詰まるいくつもの果物の皮を見て、ぼそりと裕子が言つ。

「ま、汚いのは男子に任せねばいいか

一班五人、内三人が男子という構成は、先生が決めたもの。

男子だけでは料理がなかなか進まないと、先生が以前漏らしていたのを聞いたことがある。

実際今だつて、私の班の男子三人は、何かするわけでもなく、椅子に座つて「腹減つた」を連呼していた。

あんたらいくつだよつていうシッコ!!は、グッと我慢。

「そりだね。シンク掃除は男子にやらせよ

私はスポンジに洗剤を付け足しながら応えた。

最後くらいはしっかり働いてもらいましょ。

「ねえ、尚美」

「ん？」

「マフインセ、木高にあげるの？」

「…」

裕子はいつも本当に突拍子もない。

シンク掃除からじつやれば拓也に繋がるのか。

「あれ。図星？」

何も答えられない私を見て、裕子の声が少し弾む。

以前なら、「なんで拓也にあげなきゃなんないのよ」とか言って抵抗してた私だけど、今はそうもいかなかつた。

「やつぱつやうなんだ？図星じ真ん中なんだ？」

顔が熱くなるのを感じる。

そうだよ。

図星だよ。

図星ど真ん中だよ！

私は今日出来上がったマフィンを、拓也にも食べてもいいおつと想つてましたよ。

まあ拓也も、班は違えど今一緒にマフィンを作つていてるわけで。

それと交換つていつのでもいいかな、なんて考えていたり。

一班十個ずつできるように材料が与えられているから、一人一つずつマフィンを貰えることになる。

だから、一つは自分で食べて、もう一つを拓也に…なんて。

なんというか、今の私は、自分でも信じられないくらいこの女なのか
もしけない。

あれから数週間経つて、梅雨の季節に入つた外は、サワサワと雨が降つてゐる。

相変わらず柴山さんは拓也にベッタリで、本氣でムカツク時が無いと言えば嘘になるけど。

でも、もうト校は柴山さんと一緒になることは、あれからは一度も無くて。

少々嫌な光景を目にして、部屋の机の上に飾つてあるあのパンダを見ると、大丈夫だつて思えるのだ。

何が大丈夫かは、よくわからないけど。

そして。

一度拓也のことを好きかもしないと思つてからは、ビリしても変に意識してしまつ。

無意識のうちに拓也の姿を田で追つていたり。

ノートに拓也と私の相合い傘を書いてみたり…って、これはひょひょとベタすぎて自分でも笑えたんだけど。

多分、裕子も亜理沙も、なんとなく私の変化に気付いていると思つ。

特に裕子は鋭いから。

だから今だつてひやつてからかわれてているわけで。

「ふつ。尚美つたら可愛い！顔真つ赤！」

「も、もう一裕子ーからかわないでよお

ケラケラと笑う裕子と真つ赤な私。

「「めん」めん。でも、木高きつと喜ぶよ

何を根拠に。

いくら幼馴染みだとは言え、やっぱり多少の不安はある。

同じ物を拓也だつて作つてる訳だから、断られることは無くても、「なんで交換すんの?」って変な顔をされてしまふかもしない。

「食べてくれるといいな」

私の作ったマフィンを。

拓也が笑顔で食べてくれるといい。

そんなことを思いながら、全ての食器を洗い終えて、蛇口を止める。

食器を布巾で拭こうと手を伸ばした時、ふと焦臭い臭いが鼻をかすめた。

「おい、なんか焦臭くねえ?」

「うん、俺も思った」

椅子に座っていた男子たちが首を傾げる。

確かに、臭い。

裕子と私はオープンのある方へと回った。

各班の調理台に一つずつ備え付けられている大きなオープン。

私達は一旦取り消しボタンを押して、恐る恐るオープンの扉を開ける。

その途端、モクモクとものすごい煙が立ち上った。

「うわ。ひでえ」

男子の誰かが言った。

あまりの煙に、私達の調理台の周りにゆっくりと人が集まり始める。

鉄板の上に並べられた十個のマフィンは、黒くなつた表面がプスプスと音をたてていた。

てこうか、もはやマフィンじゃないよ、これ。

「え、なんで……」

「え、こんな事になつてゐるの？」

「あ」

何か気が付いたように裕子が声をあげた。

「オープンの設定温度間違つてゐる」

「え……」

見ると、確かに決められた温度よりも高めの所に印がきていて。

「誰よ、オープンの設定したの」

裕子は言いながら、男子の方を睨んだ。

「は？俺たちじゃねえし」

「てか、富崎じゃなかつたつけ。オープン触つてたの

「へ…?」

私の方を振り返つた裕子の顔は、しまつた、とこつぶつで。

手が、ガタガタと震えた。

材料混ぜて。

型に流し込んで。

それらを並べた鉄板を、裕子と一人でオープンの中に入れて。

洗い物をするために流台へと回つた裕子を見ながら、私はオープンのスイッチを入れた。

「…あ…私…」

少しでも視線を動かせば、涙がすぐに溢れてしまいそうで。

「…あの…」、「めん…」

私は、五人分のマフィンを、十個ものマフィンを台無にしてしま

つたんだ。

「ううわ。ひやーん」

何処からか、柴田さんのおかしな声が聞こえたよくな気がした。

「本番だ…」めん…」

頭を下げる。

もひ、頭の中は真っ白だった。

私は、恐る恐る頭を上げてから、流台の方へと戻った。

「尚美…？」

心配そうに裕子が話しかけてくれる。

「あの、そんな、気にしないでいいんだよ？たかが調理実験じゃない。他の班に分けてもらえば大丈夫なんだから」

「「」めん… 本当」「、」めんね」

私は、ただ謝ることしかできなくて。

せめてシンク掃除だけでもやろうと思つて、腕を捲つた。

「尚美… シンク掃除は皆でしょ?だから尚美一人頑張らなくともいいんだよ?」

その裕子の優しい言葉に、私は静かに首を振る。

「私には、」」れぐら」」しかできないから…」

「尚美」

排水孔の蓋を取り、中に詰つたものを引っ張り出す。

ベロンと出でくる皮の塊は、やつぱり気持ちの良いものでは決してなくて。

中の網も、水で丁寧に洗つて。

かすかな生」」の臭いが、今の私は一度良いのかもしれない。

「拓也くんー。

柴田君の「拓也を浮かぶ声が聞こえてきて、思わず顔を上げる。

可愛らしさHプロンをした柴田さん、それに負けないくらい可愛い笑顔で、拓也に話しかけていた。

「アコのマフイーンあげるー超上手くできたんだある

その言葉に、私はギュッと胸をつかむ。

その一人の姿を、拓也の返事を、感じたくなかったのだ。

拓也にマフイーンを食べてもらいたい？

そんなの、いやいやありおかしい。

なに交換したいとか思つてたの、私。

夢見るのも大概にしつけて言ひてやりたい。

あんな真っ黒焦げの塊なんて、只のゴミじゃない。

いつもはしつかり聞かない調理実習の説明も馬鹿みたいに必死に聞いて、大切なところにはマークまでひいたりして。

馬鹿馬鹿、大馬鹿。

温度設定なんか間違えて、何考えてるのよ。

自分だけじゃない。

裕子にも、他の男子にも。

私はものすごく迷惑をかけた。

「なあ。」のマフィンどうする?..」

「捨てるしかないっしょ。さすがコレで黒いのは無理」

「だよな。やつぱ捨てるしかないか」

私の焦がしてしまったマフайнを見て話す男子。

私は誰にも聞こえなこよつな小さな声で、ただ「「」めん」だけを繰り返した。

何度謝つても、もう遅い。

私ってなんでこんななんなんだから。

頑張れば頑張るほど空回つして、結局は大切な所を抜かしてしまう。

ああ、もう。

最悪。

「…うつ…ひつ…うつ…」

情けなさを嘆いて、泣き声へひこ。

『うわ。ひー』

あれは、多分マフィンに對してじやなことだと想ひ。

『あなたは拓也へこひをわしへなー』

いつかの柴山さんの声が蘇る。

本当にやつだつて思ひ。

何をしても駄目な私なんかよつ。

柴山さんの方が、ずっと拓也にひこるのかもしれない。

「おとーとー拓也へん?ー

ふいて聞こえた、信じられない、とこりよつた柴田さんの呼び声の
後で、

「うのマフィン、一回もらうよ

声がして顔を上げる。

「拓也…」

「いつものあの優しい笑顔をした拓也が田の前に立つていて。

信じられないこと」、手に取った真っ黒なマフィンを、ポイと口の中に放り込んだ。

「…うん。マフィンにしては…かなづビターだな」

拓也は嫌な顔一つせずに、口の中のものを飲み込み。

「あ、食べられない」とはないけど

そう言ひて笑つた。

「なん、で……」

「ん？」

「そんなの、食べなくとも……」

柴田さんのマフィンの方が、私なんかのより、ずっと……ずっと……

「俺は、尚美のマフィン貰うのを、楽しみにしてたの」

「……え？」

「上手くできたヤツでも、失敗したヤツでも。お前のマフィンが食
いたかったんだよ」

そう言ひて、ぽんと私の頭に手を置いた拓也。

それがあまりに優しくて。

「……馬鹿じさん……拓也」

また、泣こむやつさだよ。

「……せつせぬ馬鹿ですよー」

困ったように笑う、拓也の声。

「……ほさつと馬鹿……病気になつても、知りなこんだか」

「なりねえよ

可笑くになつ」とばつかつ口から出てしまつ。

涙はまだ止まらないことこの上ない。

四時間田の終わつを告げるチャイムが、何処か遠くで響く。

「……馬鹿拓也」

「鷺鹿拓也って……。はいはい、なんですか？」

「あつがと……。」

泣きながらのこの葉は、たぶんかなり聞き辛かつたと想つ。

でも、拓也は優しく手を締めて。

「また作ってくれよな」

そう言った。

外は騒いで。

多分明田も騒いで。

まだ、シンク掃除も終わってないけど。

だけど帰りに本屋に寄って、お菓子づくしの本でも買ってかえりうかな、なんて。

私はきっと、ものすごく単純だから。

また拓也に、お菓子を作つてあげたいと思つた。

10・雨は犬と猫

10・雨は犬と猫

雨
雨
雨

昨日も雨。
その前も雨。

今朝は晴れていたのに。

『ようやく梅雨が明け、明日からは久しぶりに、気持ちの良い晴天になるでしょう』

昨日の夕方の天気予報を思い出す。

嘘こけー！

さつきから気持ちの良いくらい、思いつ切り雨降り出しましたけど？！

先生が前でプリントなどを配布する間、私は窓の外を娘めじく眺めていた。

終礼の始まりのチャイムが鳴ると同時に降り出した雨。

折り畳み傘は常に鞄の中に入れてあるから、何か問題があるわけじゃない。

でも。

「雨降りばかりが続くと、イライラもするわけで。

帰る直前に降り出せば、そのイライラも倍増するわけで。

私は今、ものすじへ機嫌が悪かった。

「尚美、帰る」

終礼が終わって、拓也が鞄をもって近寄ってきた。

私は「言われなくとも帰る」とボソリと心えて、早足で教室を出て廊下を歩く。

掃除のため少しづつ開けられた、廊下の窓。

外はまだよつと薄暗くて。

廊下に足跡が付くべりー、梅雨の湿度は高かった。

「どうしたんだよ」

「なにが？」

「なんか機嫌悪くね？」

「そお？別にいつも通りだな」

言葉とは裏腹に、ぶつめりほつな言い方をする私を見て、拓也は隣でため息をついた。

「なに?」

「は?」

いきなり振り向き、明らかに「イラついた声の私。

拓也は怪訝そうに眉をひそめた。

「ため息、ついたじゃない」

「…ぐつひーー」

言いながら、拓也は私から田線をそらし、窓の方を向いた。

そこで会話が途切れ。

拓也と私の間に漂つ、なんとも言えない、不穏な空気。

お互い、口を開こうとしない。

騒がしい放課後の廊下を、無言で歩いた。

靴箱で靴を履き替えて、出口へと向かつ。

どしゃ降りの雨。

暗い空。

帰りたくないな。

隣を見ると、拓也はもう鞄から折り畳み傘を取り出している。

私もチャックを開け、鞄の中に手を突っ込んで折り畳み傘を取り出す。

いや。

取り出せうとした。

「あ、あれ……？」

「どうしたんだよ？」

鞄の隅々まで手で探る。

「傘が…あれ…入れてた筈なのに…」

無い。

入っていない。

「は？まさかお前、傘忘れたの？」

「忘れてな…あ…」

言いかけで思ひ出す。

「部屋に…置いてきた…」

昨日、部屋でペンケースを鞄から出すときに折り畳み傘がどうも邪魔になつて。

先に折り畳み傘を鞄から取り出したんだ。

そのまま、机の隅に置いて。

「傘……忘れた……」

「……たぐ。 ドジだなあ」

呆れたところふつて肩をすくめる拓也。

ドジ、ところ言葉に、私はビリも引っ掛けた。

「ドジで悪かったわね」

私は、拓也の方を見ずに言った。

「は？ 何ムキになつて」

「拓也くーん！」

言いかけた拓也の言葉を遮り、聞こえてきたのは、もひ聞き慣れてしまったあの猫撫で声。

大きな胸を揺らして、柴山さんは拓也の腕に飛び付いた。

「拓也くーん、マツね、今超困つてるので」

上田使いは三分ピカイチ。

まるで私を無視するみたい、拓也くーんへ元気になれる。

「え、なんかあったの？」

悠長に聞か返す拓也。

大体、想像はつく。

「マツね、傘忘れちゃったの」

可哀想でしょ、と叫しながらの泣き真似は、本当に慣れたものだ。

「今日はまた電車乗るから、拓也くん、駅まで傘に入れて?」

「え…」

「お願あい!」

拓也はなんとも言えない顔をして、渋々口を開いた。

「あー、柴山、実は今日、尚美も傘忘れりやつたんだよね。で、尚美入れなきやいけないから、悪いんだけど、他の奴に入れてもらって」

「ごめんな、と謝る拓也。」

「えーー・マコは拓也への傘に入りたいのーー。」

ダダをこねる子供よつて、柴山も拓也の腕に更に強くしがみついて。

拓也は、「困ったな」と、小さく呟いた。

「柴山さんと帰つていいよ」

ぽつりと、私は前を向いたまま言った。

「…は？何言つてその…？」

拓也が驚いてじりじりを向く。

「私、拓也の傘に入れなくとも別にいいもん」

「尚美？」

拓也と私のやうとつを、柴山さんは面白しそうに見てくる。

「てか、拓也の傘なんかに入りたくないし」

言つてしまつた後で、自分でも何言つてんのか分からなくなつてきて。

最後の一言で、拓也の空氣が変わつたのがわかつた。

後悔しても、もう遅い。

「… そうかよ」

拓也は、折り畳み傘をひろげて、柴山さんの方を向いて。

「柴山、帰る。尚美は俺と帰りたくないみたいだし」

静かなその言葉からは、ひしひしと怒りが伝わってくる。

「行こ」

拓也は、その後ちらりとも私の方を見ずに歩き出した。

「あっがと、宮崎さん。じゃあねえ」

拓也の傘の下で勝ち誇ったような笑顔で手を振った柴山さん。

一人は、激しく降る雨の中、段々と見えなくなつた。

「何やつてんだ、私

一人取り残されてしまった私は、とにかく教室に戻ろうと方向を変えた。

もう少し待つてみよう。

雨、止むかもしれないし。

ペタペタとせっつき歩いてきた廊下を戻る。

もう大部分の生徒たちは下校していく、ほとんど誰ともすれちがわない。

掃除が終わって閉められた窓を、雨は相変わらず強く打ち付けている。

教室に戻ると、そこにはやつぱり誰もいなくて。

私は一人静かに自分の席に腰を下ろした。

拓也、怒つてたな。

あの静かな怒りを思い出す。

私の言つた言葉は、たぶん拓也を傷付けた。

『拓也の傘なんかに入りたくないし』

あんなこと言わされて、何とも思わない人なんて、きっといない。

拓也は。

拓也は、嫌な態度をとつていた私を傘に入ってくれるつもりだった。

頼まれなくとも。

ちゃんと私のことを考えてくれていた。

それに比べて、私は？

前を向いていた体を、ドアの方に向ける。

一つ机を挟んだその隣が、拓也の席。

たまに田代が会うと、嬉しそうに微笑んで。

私が一人でいるとき、楽しそうな声で名前を呼んでくる。

「なに？」と聞くと、拓也はいつも、「呼んでみただけ」とこいつて笑う。

拓也の笑顔は、どんな時も明るくて。

でも、私には分かってる。

あれはきっと、拓也なりの気遣いなんだって。

美奈がいなくなってしまった後も、私が寂しくならぬようひたって。

ゆっくりと椅子から立ち上がり、拓也の席まで歩いていく。

机の端には、以前私の歴史のノートに描かれていたのと同じような
ウンちゃんが。

それを見て、私は小さく笑つた。

椅子を引き、座る。

少しガタガタとなるこの椅子に、拓やは毎日座つているんだ。

誰もいない教室には、雨の音と時計の秒針の音だけが響いていて。

それが妙に大きく感じられた。

拓也に対する自分の気に気が付いてから、私はたまに疑問に思つ
ことがある。

柴山さんごとに入られている拓也。

最近では、柴山さんのアプローチは更に大胆なものになつてきていると感じることが何度もある。

それを見て、やっぱり私は良い気はしない。

ていうか、嫌だ。

だけど。

私は、本当に拓也のことが好きなんだろつか？

幼馴染みとしてだけじゃなく、恋愛対象としても。

柴山さんと拓也が仲良くなっているのを見て嫌な気持になるのは、単に柴山さんのことが自分の考えている以上に嫌いだからじゃないだろつか？

そう、私は疑問に思うのだ。

だけど。

いつも通り、拓也の席に座つてみてわかつた。

私はやつぱつ、拓也のことが好きなんだって。

普段拓也の座つている椅子に、教科書を開いている机に、私は今触
れていて。

それだけで、今こتناにもドキドキしてゐる。

「好き」

私はそつと呴いて、自分のその言葉にまたドキドキする。

誰もいない、静かな教室。

だけど私の胸の音は、私にしか聞こえない。

「雨、止まないな

あの時。

拓也が傘に入ってくれようとした、あの時。

柴山さんよりも私を選んでくれて、本当はちょっとびり嬉しかったの。

だけどそんな風を見せたくないくて。

機嫌の悪い、嫌な態度を突き通しちゃった。

私は意地つ張りで。

それは私自身もわかってる。

でも、言つてはいけないことは言つてはいけない。

それなのに、私は拓也に酷いことを言つた。

拓也を、傷付けた。

「嫌われちゃつたかなあ

隣はもう少し開けていてくれると喜んでくれた若狭。

でも、もしかしたら今いまも、柴戸さんのものになってしまったかもしね。

窓の外を見ると、極足はあつくなるばかり。

一瞬空がピカッと光つて。

その後大きな音を立てて、雷が落ちた。

「そのまま止まないかもしね

雷まで鳴り出しじ。

かひうひうひもなれって思つた。

低い音で轟く空。

また、空が光った。

「尚美ー。」

雷の落ひるめと同時に、これなり教室のドアが開く。

そのガラガラの予想外の音に、私は驚いて振り返った。

「拓也ー？」

開いたドアのところには、びしょ濡れの拓也が立つていて。

「え…どうして…」

「…心配で、戻ってきたんだよ」

居心地の悪さに、拓也は私の顔を見ずにぶつかりまづて答えた。

「私を、心配してくれたの？」

「…やうだよ」

「あんな酷い」じと睨つたの?」

「お前の口の悪さはもう慣れた」

最後の一言は少し引っ掛かるけど。

拓也が来てくれたことは、やはり素直に嬉しくて。

「柴山さん?」

「率直して、先に行つてもらつた」

「なんで、そこまで」

「だつて」

私の言いかけた言葉を、拓也が遮る。

「お前、雷古手だつたろ?」

そう言つて、拓也は静かに微笑んで。

その優しい笑顔を、私は誰よりもハンサムだと思つた。

「…雷なんて、もう恐くないもん」

ほり、また可愛くない」と言つ。

「あれ? 雷鳴る度にへソ押されて、逃げ惑つてたの何処のどいつだ
よ

「なつ… …それいつの話よー。」

幼稚園のときの恥ずかしい思い出を出され、拓也をポカポカと叩く。

「痛いって」と言しながら笑う拓也。

その時、ふと目が合つて。

私は、叩くのをやめる。

静かに、ただ見つめ合つた。

まるで、それ以外の方法を知らないかのように。

どちらも、視線をそらすことなく。

私たちは見つめ合つていて。

このまま、時間が止まるんじゃないのかつて思った。

「もう下校時刻は過ぎてますよー」

いかなり声をかけられ、一人してビクリとする。

見回りに来た田畠の先生は、隣の教室へと歩いていった。

なんとか居心地が悪くなり、そつと拓也の方を向くと田中が合図して。

なんだかおかしくなつて、一人で笑つた。

「帰るか」

「うん」

拓也の言葉に、鞄を取りに自分の席に戻り、向きを変えた。

「あ、拓也」

私は、窓の外を見て嬉しくなつた。

「あ」

拓也も、窓の外を見る。

「雨止んだね」

わらわの胸せきのよつて、空せ夕日の赤で明るかつた。

梅雨が、明けたのだ。

「もうすぐ夏だな」

拓也は嬉しそうにうなづいた。

「うん」

私は鞄を持って、拓也の隣まで歩いていた。

拓也の腕に、自分の腕を絡めた。

拓也はそれに少し驚いたようご、私の方を向いた。

「尚美？」

「えへ、柴山さんの真似ー」

明るい声とは反対に、私は恥ずかしくて、拓也の方を向く」ことができなかつた。

「濡れるぞ？」

「いいの」

私は、まだグショリと冷たい拓也の体に、更にギュッときつこいで。

私にしては、少し大胆だったかななんて思つたり。

「うしー、じゃあこのまま帰るかー！」

そう言つて、拓也の腕が私の肩に回る。

「やっぱ俺の隣はお前だわ」

そう、言われたような気がした。

ねえ、拓也。

今、拓也は何を思つてゐる?

拓也に触れている部分が全部熱くて。

私は、死んじやこないだよ。

私がもしも拓也のことが好きだと云つても。

拓也はまだ、この腕を離さずここにてくれる。

柴山さんじやなくて私のために。

ねえ、お願い。

この場所を、置いておいて欲しいの。

11・まな板のダンス

11・まな板のダンス

早いもので、明日から期末テストです。

いつもとあまり変わらない教室の雰囲気。

だけビ監の手にはバツチリ、ノートや参考書が。

うん。

さすが高校一年生。

そろそろ本氣で単位を気にする人が出てきたのだ。

期末だしね。

私はこうと。

数学では今回も点が取れなもんだ。

次の授業は音楽。

内職にはもつてこいなわけで。

私は生物の教科書でも持つて行こうかなど、机の中から教科書を取りだし、パラパラとめくつた。

その時、一枚のプリントが入っていることに気が付いて。

恐る恐るその折り畳まれたプリントを開く。

「
げ

先週やつた染色体の観察レポート。

提出締め切り、本日の十三時。

只今、十四時七分。

一時間と七分のタイムオーバー。

私は勢い良く椅子から立ち上がり、

「裕子！亞理沙！ちょっと職員室行くから、先に音楽室行ってー！」

やつぱり、返事を待たずに教室を飛び出した。

一階にある教室から、一階にある職員室へと急ぐ。

何人かの先生と擦れ違つたけれど、高校生にもなると、もつさすがに「廊下は走らない」とか注意はされない。

擦れ違う時に軽く会釈をして通り過ぎる。

職員室の前で急停止し、ノックを一回して「失礼します」と言ひながらドアを開けた。

生物の先生は、自分の机で何か書類を書いていた。

静かにそこまで歩いて行く。

「岸田先生」

名前を呼ぶと、先生はまつりと書類から田を上げ、私の方を向いた。

因みに岸田先生つてのは生物の先生のことね。

「あら、高崎さん。どうしたの？」

椅子をぐるつと回転させた。

「あ、あの、一時までに出さなきゃいけなかつたレポート、出すの忘れてて…。もひ受け取つて貰えないでしょつか？」

「あーそれね。わかりました、次からは気を付けなさいね」

先生は私からプリントを受け取つて、優しく笑つた。

「ありがとうございます」

「はい」

私は小さくお辞儀をすると、静かに職員室の出口へと向かった。

「あ、富崎」

名前を呼ばれ振り返る。

職員室の中をキョロキョロと見回すと、音楽の早川先生と田が合つた。

先生は椅子に座つたまま私を手招きしている。

そつと机の方を見ると、結構な量のプリントの束が。

嫌だなと思いながら、私は渋々早川先生の所へと歩いた。

「…なんですか」

「いやー良じとひこいてくれたよ、富崎」

そつ言いながら笑う早川先生は、私たちの入学と同時に音楽の常任教員となつた、まだ若い男前だ。

「このプリント、次の音楽で使つんだけど、音楽室まで持つて行って配つておいて欲しいんだ」

大体予想はしてたけど、

「えー」

素直に不満を露にする。

「頼んだぞー！宮崎ー！」

そつ置いて、先生はその紙束を私に押し付けた。

「さつと今学期の音楽の成績は十だらうつな。ね、先生」

「…」

何も答えない先生に思いつ切り笑顔を作つてやつて、私は紙束を抱えて職員室から出でていった。

漫画に出てくるみたいに、前が見えなくなるような、そんな厚さではないけれど。

多分新しい楽譜なのだろう、数種類の異なつた印刷があることが分かる。

「おも…」

紙といつものは一枚や一枚では重さなんて無いものの、こんなにもの量になれば結構な重さが有つた。

これくらいのプリント、自分で配れつひとつ。

私は独りぶつぶつ文句を言つながら、二階にある音楽室を手指した。

二階に続く階段を上り終え、あと少しで音楽室。

梅雨が明けてからは、痛いくらい眩しい太陽がサンサンと輝いている。

今日も良い天気だなんて思いながら、窓の外に視線を奪われている時だった。

「うん！」

「あやつ」

前から人が歩いて来ていたのに気が付かず、その人にぶつかつた私は派手に尻餅をついた。

プリントの束が、ドサリと崩れる。

「… いってえー」

「あ、ごめんなさいー！」

どうやら相手も尻餅をついたようで、同じようにして田の前に男子が一人座り込んでいた。

長めの茶髪と、耳には骸骨のピアスが一つ。

だらしなく結われたネクタイが、眞面目な生徒ではないことを示唆している。

拓也とは正反対だと、その時私は思った。

「ボサツと歩いてんなよな」

「す、すみません」

そいつは小さく舌打ちをすると立ち上がり、ズボンをパツパツとはらった。

うん。

今の舌打ちは聞こえなかったことにしてやつ。

「おー」

「は、はー」

そいつは、最後に踏みをするように私を見下ろし、

「次からまひとつ前見て歩け。マナイタ」

そう言つて、私がさつき上つてきた階段を降りて行った。

「ま、まな、いた…？」

その意味が最初よく分からなかつたが、自分の口で言つてみて、ようやく理解した。

私はバツと自分の胸を見る。

「む、胸無くて悪かつたわねー！」

私は、もう誰もいない階段に向かつて叫んでいた。

プリントをなんとか集め終え、音楽室へと向かう。

あの怒りはまだ消えていなかつたけど、ぶつちやけ誰かに相談するのも恥ずかしい話なわけで。

チャイムと同時に入った私を見て駆け寄ってきた拓也に向かって話すわけにはいかなかった。

「遅かつたじゃん」

「…まあね」

「どうした? 何か嫌な」とでもあったか?」

私がプリントを配るのを手伝いながら、拓やは私の顔を覗きこんだ。

「べ、別に!」

いきなり顔が近くなり、思わず顔をそらす。

多分私の顔は、今ものすごく赤い。

そして。

隣でプリントを配る拓也をちらりと見て、思った。

やつちの奴とは、やつぱつ正反対だった。

無造作にセシートされた髪は、長すぎず短すぎず、色の抜いていない髪が、印象を良い風に元々を締めてくる。

スッと通った鼻筋は、どちらも共通していくつもがするけれど。

田は、違つ。

拓也の田は綺麗な一重で、やつちの奴よりも優しく田をしてくる。

プリントを配り終わったといひで早川先生が入ってきて、私は拓也に「ありがと」と言つて席についた。

やつち配ったプリントは『温鷗』の楽譜だったらしい。

教室に、あの夏のメロディイが静かに響く。

ふと、少し離れた拓也を見た。

楽譜に田を落とし、小さく口を動かしていく。

ちやんと歌つてゐるのを、ちよつとかわいにと思つたり。

そのままボーッと拓也の方を見ていると、拓也の前の席の女子が、ぐるりと拓也の方を向いた。

柴山さんである。

むつむつ決まりのパターンですけどね。

だけど。

あんな事があつた後の今、私の視線はどうしても柴山さんの胸にいつてしまつわけで。

「柴山さん… 大きいなあ…」

ボソリと呟いた私の言葉に、近くの席の人たちがこちりを向いたような気がしたが、あえて気付かないふりをした。

楽しそうに話している拓也と柴山さん。

一人が仲良くするのは嫌だけど、今はそれよりも、あることが頭の中で不安の渦を作っていた。

拓也はやつぱり、ペチャパイよりも巨乳の方が好きなんだろうか。

私のように胸の小さな女の子なら、多分誰でも一度は不安に思つた。

黙田。

好きになればなるほど、自分の短所が心配になつてくる。

私は、もつ何も考えないようこそ、心地よく響くピアノの音に、ゆっくりと瞼を下ろした。

「尚美…尚美…」

名前を呼ばれて田を開けると、皆が音楽室から出していく所だった。

そして、私の横には拓也が立っている。

「拓也…」

「お前…ガン寝しそぞ」

「音楽、もしかしなくてももう終わつた?」

私の質問に、ゆづくりと頷く拓也。

「だから、ほら、もう教室戻るぞ」

拓也の言葉に、私は椅子から腰を上げる。

少し前を歩く拓也を追い掛けようとして、私は音楽室から出た。

強い日差しで眩しい廊下を、二人並んで歩く。

外はきっとめちゃくちゃ暑いんだらうなんて考えてると、拓也が口を開いた。

「テスト終わつたらや、どつか遊びに行くか

「え？」

いきなりの提案に、私は一瞬何て言つていいのか分からなかつた。

「金曜にテスト終わるだろ？だから土曜とか」

「二人で？」

「そ。二人で！」

ニカリと笑う拓也。

私は、心臓が早くなるのがわかつた。

「行く！」

嬉しそうに答える私を見て、拓也はまた笑つた。

12・ベッドの下には秘密の花園

12・ベッドの下には秘密の花園

「ねえー、休憩しようよー！」

「あと十分で一時間だろ？一時間勉強して、それから休憩って決めたんだから、もう十分頑張れ」

さつきから何度も「休憩」を連発しているのは私。

それを抑えるのが拓也。

今拓也の部屋で、一人で勉強中なのだ。

「もう無理ーー！」

「今日の現国の中止はまあまあだつたんだろ？じゃあその調子で、明日の数学も頑張れよ」

言いながらまだスラスラと数列の問題をこなしていく拓也に、私はガバリとテーブルに突っ伏した。

「現国と数学は全然違つもーん」

「尚美ならやれる」

「適当なこと言わないでよー」

「うう頑張つたつて、私が数学で点数がとれない」とは、拓也だつてよく知つてゐははずでしょ。

「帰り道に買つたケーキ食べよつよー」

拓也と私は、学校からの帰り道、あのいつものケーキ屋さんでケーキを買つた。

「私の洋梨のタルト、めちゃくちゃ美味しいだつたなあ

自分の買つたケーキを頭の中に思い描く。
しつとりとしたクッキー生地のタルトに、洋梨のコンポートがきらきらと輝いていて。

「あー早く食べたいーー！」

私はもはやダダっ子以外の何者でもない。

「お前ねー」

拓也はシャーペンをコトロと机に置くと、問題集から田を上げた。

「ちよつと我慢して頑張るひことできないわけ？」

「もう我慢したもん。充分頑張ったもん！」

「ほお。その割には、ノート綺麗な気がするんですけど」

言われて、体勢を変えてノートをガバリと隠す。

「見間違いです」

計算問題の小問一問しかすすんでいない」とは、多分知られるとま

すい。

「今回の数列はパターンなんだから、しっかりやればそれだけ点数はとれるんだぞ？もう今回のテスト悪くても、やり直しへ手伝ってやらないからな」

「えー！拓也がいなきゃ無理！絶対無理！」

「だいたいなあ、お前は」

「あー」

本日何度目かになる説教を始めたみつとした拓也の声を遮る。

「…なんだよ？」

いきなり遮られたこと、幾分機嫌をそこねたよつとじた拓也の眉を寄せる拓也。

私はそれでも得意気に、壁に掛けられたシンプルな時計を指差した。

「もう一時間経つたよー」

勉強開始から一時間十五分。

どうでもいい言い合いで、すっかり時間をとってしまった。

拓也ははあと一回ため息をつくと、一階へとケーキと飲み物を取りに行つてくれた。

紅茶でいいかと聞かれたから、多分すぐには戻つて来ない。

拓也の部屋で一人きりの私。

物色するには、なかなか良い機会じゃない?

「まさか拓也にかぎって、変なもの持つてないわよねー」

私はよいしょと腰を上げると、

「抜き打ちの持ち物検査よ」

そう言つて机の方へと歩いた。

スッキリと片付けられた机の上には、薄型のノートパソコンと、数本ペンの入れられたアルミのペン立てが置かれている。

本棚には結構な量の参考書と漫画が。

うん。

机には変なものは無いわ。

そつと机から離れる。

引き出しの中は、ちよつと気が抜けたのでやめておいた。

私はぐるっと部屋中を見回した。

机にくつくつと設置された大きな本棚。

紺のシーツのシングルベッドと、その上の天井に貼られたバックストリー・ボーディズのポスター。

私のよりもシンプルなこの部屋は、やはり男の子のものだからだろうか。

何度も足を踏み入れたことのある「」の部屋には、いつもかすかに拓也の香水の香りがして。

落ち着くとこえは落ち着くけど、緊張するとこえは緊張する。

ベッドの方を見る。

少し大きめなベッドのシーツには、いくつもの皺が入つていて。

「こつも」で拓也は寝てるんだ…」

考えるだけで、顔が熱くなる。

「…って、何考えてるのよ」

両手で思わず頬を包んだ。

「案外ベッドの下に隠してたりして」

ショート寸前の思考を変えるためにでた、苦し紛れの言葉。

あまりにベタすぎるか、なんて一人笑いながらベッドの下を覗き込み、一応チェック。

「てかこんな所に隠してあるとか、本気で笑え」

る、が言えなかつた。

ベッドの下に積まれた雑誌。

熱かった頭の熱が、サーッと引いていく。

私は、ゆっくりと彼らの雑誌を引き出しだ。

「…」

表紙に書かれた、過激な売り文句。

雑誌を持つ手が、ワナワナと震える。

「ほひ、ケーキと紅茶持つて来たぞ」

ドアが開き、拓也が入つて來た。

テーブルの上におぼんを置く音がしたのと同時に、手にしていた工口本を拓也に投げ付けた。

「あやつー」

いきなり飛んで來た雑誌に、拓也は情けない声をあげる。

雑誌は軽く拓也の頭をかすめると、ぱたりと床に落ちて。

読みかけの本を開いて伏せるような形で落ちたその雑誌の表紙には、大きな『爆乳』の二字。

それを見て、拓也の顔色が変わるのがわかつた。

「尚、美、なんで、これ」

「なによ、それ

「なあ

「何ベッジの下とか隠しちゃつてんの？あきたりすぎんのよー。」
のミスター・マン。

「落ち着けって」

「もつとましん隠し場所見つからなかつたわけ？！せめて弓を出し
に入れて鍵閉めるとかさあ

焦る拓也の顔が、情けない」というのうえなかつた。

なおも、私は続ける。

「てか。なに、爆乳つて？そんなにデカ乳が好きなわけ？叶姉妹が
好きなわけ？！」

「…いや、叶姉妹は別に関係ないんじや

「そんなに乳が好きなら牧場行つたら？んでもつて死ぬほど牛産め

ば？！」

「尚美、」

「やつぱり拓也も、ペチャパイより大きい方が好きなんだ…」

「何言つてんだよ」

「…私なんかより、柴山さんの方が、好きなんじょ…」

「ちよ、とにかく話聞けつて」

「…」

「尚美？」

拓也が心配そうに首を傾げる。

怒鳴りまくっていた私がいきなり黙ってしまったから。

不覚にも、自分の言った言葉に泣けてきてしまったのだ。

これが悔し涙なのか悲し涙なのかは、分からぬけれど。

「…私だって、好きでマナイトになつたわけじゃないもん…」

「え?」

私は拓也の方まで歩いて行くと、せつを投げ付けた『爆乳』雑誌を手に取つた。

「…いろんなもの」

『爆乳』のコーナーのページを開け、両手でもち、手に力を入れる。

「…ハシハシてくれるわーー!」

「ビコビコ」という音と共に、巨乳娘がまつぶたつになつていいく。丁度、私には無い胸の谷間あたりで。

「あーー!」

拓也はその光景に悲鳴をあげたが、そんなことどうだつていい。

そのページを破り終えると、私はそれらを再び床に落とした。

「ふんー。」

拓也の視線は、半分に破かれた巨乳娘から離れなくて。

それがまた私をなんとも言えない感情にした。

「…どうすんだよ」

また涙が溢れそうになつた時、拓也が静かに口を開いた。

「は？」

「…」れ、俺のじゃないんだぞ

「…え？」

思考回路が一瞬にして止まる。

「いや、クラスの吉田のなんだよ」

「…」

拓也はまた「ビーハンマー」と書いて、私がめちゃくちゃにした雑誌を拾い上げた。

「な、なんで、その吉田くんは拓也にそれを預けたりしたのよ?」

「昨日彼女が部屋に来るとかで、俺に預かって欲しいって頼んで来たんだよ」

もっともなその理由に、私は何て言つていいか分からなくて。

拓也がはあと大きなため息をついたので、私は無意識に「「めん」と謝つた。

「そんなこと、全然知らなかつたもん…」

「だから話聞けって言つたんだよ」

「わ、私、セロハンテープで張り付ける」

私の言葉に、拓也は力無く笑つて。

完全に立場逆転である。

「…」めん、本当に「」めん

「…まあ、女の子が見るべき物じゃないのに、すぐに見つかるよつ
な所に置いてたのも悪かつたし」

「でも」

「もつここつて。雑誌は、もつこいから」

もつこつと、拓也は手に持つていた雑誌と、私が引つ張り出してき
た雑誌を、またベッドの下へと戻した。

「たださ」

ベッドの方を向いたまま、拓也は続ける。

「俺は別に、女を体で選んだりとかしないから

「え？」

「だから、尚美より柴山が好きとか、それは違うから

「拓也？」

「俺が言いたいのはそれだけ！」

その時ぐるりと私の方を向いた拓也は、もう二つも通りの明るい笑顔で。

「さ、ケーキ食つたらまた数学すんぞー。」

「あ、うんー。」

私は素直に従つた。

『尚美よつ柴山が好きとか、それは違つから』

わざの言葉が頭の中で何度も何度も繰り返される。

まるで、壊れたCDプレーヤーのよつ。

ほんとはね。

柴山さんより私の方が好きって、聞いてしまったかったの。

でも、状況が状況だし。

いや、ほんと、今は偉うなこと言えませんからね。

けど。

うん。

あの言葉は、素直に嬉しかったよ。

私は爆乳じゃないけど。
てか谷間すらないけど。

拓也のこと、大好きです。

13・君の顔色に魅せられて

13・君の顔色に魅せられて

チャイムが鳴り、一斉にシャーペンを置く。

答案用紙を回収されながら、全員がテストからの解放の喜びの声をあげた。

「終わったー！」

四日間にわたる一学期学期末考査が、たつた今終わったのだ。

テストのドリルや成績表など、過ぎたことは海や山でも仕方がない。

もう私たちのすべき四の前までやつてきてくれるのは、

「夏休みだー！」

そしてもう一つ。

私には、もっともっと大きなことが。

「尚美」

軽い終礼が済み、それぞれが鞄を手に教室から出ていく中、私を呼ぶ拓也の声が聞こえる。

「拓也」

「明日、何処行きたいか考えたか?」

そう。

明日。

「んー、まだよく分かんないけど、映画とか?」

「映画かー。今何かおもしろいのやってたっけ?」

拓也が手を額に添えて、最近の話題作を考える。

そんな姿も、絵になるへりこキマッてたりして。

明日、私は拓也とデートをします。

一緒に遊んだりしたことは何度もあるけど。

実は一人でわざわざ出かけるのは、これが初めてだったりする。

「あ、ほら、バイオハザード…今やつてなかつたっけ?」

「バイオハザード?」

「ほら、ゲームが基になつて作られたやつ。なんかかなり面白いやつ

しこよ

その後拓やは、もつ一度「バイオハザード」と囁きながら何かを考えたよつで。

頭の中で一段落つべと、拓やは笑顔で〇〇と言つた。

その笑顔を見て、私は更に明日が待ちどおしくなった。

「尚美、もう帰るだろ？」

聞かれて、私が「うん」と答えようとした時、

「富崎……」

いきなり大声で呼ばれて、少し驚く。

見ると、教室の前のドアから、音楽の早川先生が顔を突き出していく。

以前にもあったように、私に向かって手招きをしている。

うん。
行きたくないな。

聞こえなかつたふりをしようかと思つたとき、再び大声で名前を呼ばれ、仕方なく拓也に「先に帰つといて」とだけ言い、先生の所へと向かつた。

「…なんですか」

「いやー、恥ことひじてしてくれたよ、高崎

前にも同じような会話をしたなあと想い出す。

相変わらず先生は、悔しいけど男前だった。

「実は音楽室の掃除を少し手伝つて欲しいんだ

はい、きたー。

「え、嫌ですよ。なんで私が。音楽係とかいるじゃないですか

もっともな不満を明らかにする。

「それが音楽係の子たち、言つても絶対来てくれないんだよ

困ったよつて肩を上げる先生。

「うちのクラスの音楽係を思って出す。

……確かにギヤルだ。

「でも、だからしながら私が

「」の前手伝ってくれただろう。その時は本当に助かった。それから
て頼まれてくれるのは、もう面倒くさいなんだよ

「でも……」

あの時手伝わなきゃよかったです、後悔してももう遅い。

「頼むよ、富崎」

顔の前で手を合わせ、必死に頼み込んでくる先生。

「……わかつました」

そんな姿を見て、断わるななど」と、私はさすがに出来なくて。

「富崎ー・あつがとうー。」

途端に先生の顔が輝き、それが少しだけ、ほんの少しだけ、嫌だな
ところの気持ちを軽くしてくれた。

「今から音楽室に行けばいいんですね？」

「ああ。で、簞で床掃いて黒板拭くだけでいいから」

「先生は、」

「悪いけど今から会議で行かなきゃいけないんだよ。終わったら適
当に帰つてくれたらいいからー。」

「えつ、ちょつ

「じゃー・頼んだー。」

言い終わる前に、先生はピューッっていう効果音が聞こえてきそう
な勢いで、階段へと走つていってしまった。

「先生ーー。」

一応叫んではみたものの、先生が戻つてくる気配は無い。

逃げたよ。

あの先生。

教室に戻つて、拓也にもう一度先に帰つておくよ。これから、私は音楽室へと向つた。

防音製の重いドアを開けてみて、驚く。

私の他にもう一人、早川先生に掃除を頼まれた人がいたらしい。

こちらに丁度背を向けるようにして立つていたので、そこにいる男子生徒の顔は分らなかつたが、箋をもつてゐることはちらりと見て取れた。

「あのー、私も掃除で・・・」

そのとき初めて私に気が付いたよつこ、その生徒まぐるつといひながらを向いた。

あ、ほら。

やつぱり簞もつてゐる・・・つて、

「あーー！」

顔を見て、私は思わず大声をあげた。

「あ、あんた、あの時のー！」

「なんだ、お前か。マナイタ」

簞を手に立つてゐる色の薄い髪をした男は、私を見ておかしそうに口の端を上げた。

そこに立つていたのは。

そう。

テスト前日、丁度プリントを手に音楽室に向つ途中正面衝突した、あの、私を『マナイタ』よばわりした不良野郎。

「なんであんたが」ヒヒこんのよ」

「見て分かんねえ? 掃除しにきたの。胸の貧弱い奴は頭も貧弱いんだな」

鼻で笑いながらのその言葉。

やつぱりムカツク奴だ。

「や、それくらい分かってるわよー。」

「じゃあ聞くな」

「私が聞きたかったのはそういうのじゃなくて、なんであんたみたいな不良野郎が掃除を引き受けたのかってことー。」

一気に言い終えて、一度大きく息を吸つ。

不良野郎は、なんだそんなどとか、とでも言ひよつて肩をすくめた。

そして、得意げに、

「んなの、俺が優しいからに決まってんだろ？が

そう言った。

「・・・

「なんだよ

「・・・いや、あの、それってツツコめばいいのか、それともスル
ーしたらいいのか

「な、本当のこと言つただけだろ！」

私の言葉に、顔を赤くする不良野郎。

それがおかしくて、少し笑えた。

「なに笑つてんだマナイタ」

「べつにー」

まだ笑が止まらない私に、奴は恥ずかしそうに頭を搔いた。

不良野郎は耳まで真っ赤にしていて。

うつするにだ。

この不良野郎も身形はこんなだけど、頼まれたら断れない、いわゆるお人好しなのだ。

「箒、あそここのロッカーの中にあるから、笑つてないでさつさと掃除しない。マナイタ」

「はーはー」

私は言われたように箒を取り出していくと、適当な場所を掃き始めた。

サッサッといつ一本の箒の音が響く。

窓の外からは野球部の掛け声が聞こえてきて。

静かな時間だなあと思った。

「ねえ

「ん？」

「不良野郎は何年なの？」

「俺？二年。」

「え、最高学年じゃん」

髪型からして同学年か年上だろ？と思つていたけど、実際三年と言われると少し驚く。

「それがどうした。てか、お前一年だろ」

「は？！違うし！一年だし！って、あ、それより、受験とか大変じやない？大丈夫なの、こんな掃除なんかしてて」

「あー、俺推薦だから」

「はい？」

今、『推薦』って言いました?この人。

「ちよ、『めん。聞き間違いかもしれないけど、今『推薦』って言った?』

「言った

「え、『推薦』って学校から推薦されるってことだよね?」

「そうだよ

私の態度に、眉を寄せる不良野郎。

「・・・あんた、学校から『推薦』されんの?」

世も末だつていう顔をする私を、不良野郎はまた鼻で笑つた。

「お前、俺の実力知らねえだろ?」

「知ってるわけ無いでしょ」

たつた今まともに話したばかりで、あんたの何を知ってるっていうのよ。

「しゃあねえな。いつちょ聞かせてやるか

「え、聞かせ?え?」

不良野郎は、少し長めの髪を腕に嵌めていたゴムで一つにまとめ、ピアノの方へと歩いていく。

家には置けないような、立派なグランドピアノ。

その黒い体が、蛍光灯の光を浴びて艶やかに輝いている。

奴は蓋に手を掛け、そつとそれを開けた。

少し黄ばみかけた鍵盤に、優しく指を乗せる。

まるで、愛しむよう。

まるで、恋人に触れるかのよう。

鍵盤から一瞬指を上げた次の瞬間。

この空間を激しい旋律が埋め尽くした。

この曲を、私は知らない。

体を揺らして鍵盤を叩くこの男を、私は知らない。

それはまさに、ピアニスト以外の何者でもなかつた。

縋れるように動くその指先は、決して狂うことなく。

激しく胸を打つその音を、本当にこの男が奏でているのだらつか。

ここが何処なのかが分らなくなる。

外の喧騒は、もはやぴたりと止んでしまつているかのよう。

時が進んでいるのか、止まっているのか。

それすらも、分らなくしてしまった音だった。

不協和音のような複雑な和音を叩き、不良野郎はピアノの方に偏つていた体をがばりと戻した。

少しの間、沈黙が流れる。

その間に、全ての感覚が戻つてきて。

「す、す、す、」

やつとのことで口から出た私の言葉は、酷く間の抜けたものだった。

「え、今、本当にあんた?え、す、す、す、」

「まあな」

不良野郎は満足そうに髪の「ゴム」をぱすした。

「音大に入つて、将来は留学したいって考えてる」

そう、奴は言った。

蓋を開めたピアノを、優しく撫でながら。

私は、この不良野郎が推薦されることに、心から納得した。

「よし！掃除も適当にやつたことだし、帰るか

言いながら立ち上がり、不良野郎は鞄を手に取る。

「え、黒板は？！」

「お前が来る前にやつた

「あ、え、ありがと」

ガラリとドアを開け、一歩踏み出した所で、不良野郎は立ち止まつた。

「河本駿。将来のビッグピアニストの名前だ。覚えとけ」

「うわもと、あと……」

背を向けたまま放たれた、なんともキザな言葉。

でもやは、やつれのピアノで田舎町を駆けあげる」と云ふ。

「あ、私は尚美、富崎尚美つてこいつの……」

私が言い終わると、河本はぐるりと私の方を向き、

「ん。じゃあな、マナイタ」

ひりりと手を振ると、廊下を歩いていった。

「もつー・マナイタじゃないばー。」

ぽつんと私一人になつた音楽室。

外からは、まだ元気のいい掛け声と笛の音が聞こえる。

河本聰。

未来のビッグピアースト。

けじやつぱりムカシク奴。

でも。

なんとなく、嫌いじゃないかなつて。

そう思えた。

14・モノクロ涙

14・モノクロ涙

朝六時半に田覚ましをやัとして。

田覚まし時計は、しつかりと頼んだ通りの時間に私を起ししてくれた。

ボタンを押してから、うーんと背伸びをして、床に足をすべ。

窓の所まで行きカーテンを開けると、外は気持ちのいいほどの晴天だった。

「うん。 いい田こなうそつ」

思わず笑顔が溢れてくる土曜日の早朝。

駅前十時に待ち合わせで、六時半に起きる自分に、少しだけエールを送る。

がんばれ、尚美。

とびきり可愛くなるのよ、尚美。

私は部屋から出で、そつとダイニングへと向かった。

平田は仕事のために朝の早いお父さんとお母さん。

十日へりこま、ゆづくつ眠りかげたいじやない。

まだ暗いダイニングに電気を付けた後、裏庭に面している大きな窓の雨戸を開けて、室内に太陽の光を入れた。

お父さんもお母さんもまだ起きていない、私だけの朝。

たまには新鮮でいいかもしれない。

食パンを出してきてオープントースターで焼き、インスタントのコーヒーをいれる。

テーブルにもつていき、いただきますをしてから、一人で静かに食べた。

まだ涼しい、夏の朝。

うちには朝顔はないけど、たぶん今頃満開なんだろ? な。

そんなことを考えながら、コーヒーを飲み終えると、食器はそのまま洗面所へと向った。

顔を洗つて、歯を磨いて。

ほんでもつてちょっと眉毛を整えて。

うん。

なかなかいい感じ。

鏡の中でニコッと笑顔をつくっている私は、傍から見ればかなり気色の悪い人だろ? けど。

今日は、特別なんです。

その後また静かに部屋に戻ると、お父さんとお母さんが起きあがる音がして。

時計を見ると、八時を少し回ったところだ。

あの有意義な朝の時に、結構時間をとってしまったと後悔する。

私は少し急いで、クローゼットを開けて服を取り出した。

中間テストが終った後にお母さんに買つてももひつた、白いワンピース。

キャミソールのような形になつていて、丈の短いデニムジャケットを上から羽織るやつ。

あつきたりだけど、どうしても欲しくて。

実は、このワンピースを着るのは今日が初めて。

パジャマを脱ぎ捨て、慎重にチャックを下ろし体を通す。

姿見をちらりと見ると、やっぱり可愛くなつて満足してみて。

チャックを上げたあと、『ハーモジヤケットに腕を通した。

うん。

服はこれで良し。

肩に付くか付かないか程度の短い髪は、残念ながら巻いたりできな
いから、白と黒のチェックのカチューシャを付けた。

普段は化粧なんてしないけれど、アイライナーを引き、上瞼にベー
ジュのシャドウを、涙袋のところに白のシャドウを軽く乗せて。

最後に桜色のリップを引いて完成。

おれおれの姿見の前に立つてみる。

「おー」

思わず自分に賞賛の声をあげた。

慣れていないにしては、目の前の鏡の中にはこの女な女の子が立っていて。

「拓也、可愛いって言つてくれるかな」

逞しい想像力に、筋肉がだらしなく緩む。

時計を見ると九時二十分。

うん。

丁度良い時間じゃない。

私はお気に入りのシルバーの鞄をタンスの中から取り出した。

うつと。

取り出そうとした。

「・・・ない」

以前にも同じようなことがあったかもしけれど、そこは敢え

て気にしない。

今は目の前の現実だけ。

「え、なんで、なんで無いの?」

少しづつヒステリックになりながら、タンスの中をかき回す。

けど、やつぱり無くて。

「うなつたら、もう助けを借りるしかない。

「お母さん!私の銀色の鞄知らない?!」

私はドスドス走って、ダイニングへと向った。

ドアを開けると、お父さんもお母さんもゆっくつと朝食タイムで。

「尚美の鞄?あーどうかで見たわね

「その『ビック』ついでにねー。」

「そんなの忘れたわよ。ちよっと待って、一緒に探してあげるから

食べかけのトーストをパン皿に床すと、お母さんは椅子から立ち上がり

客間、廊下、トイレ、洗面所。

あらゆる場所をひっかき回す。

途中からお父さんも加わり。

ヒステリックを起こす私に、お母さんが軽くキレて。

家族みんなで、家中を探し回った。

それから一十分。

ようやく見つかった私の鞄ひゃんは、私の部屋の、せつぜ脱ぎ散らしたパジャマの下。

灯台下暗じつてね。

時計を見ると、十時五分前

「あー！ 遅刻だー！」

結局いつなる。

「走つてこきなさい、走つて！」

鞄がパジャマの下から出てきたことでかなり機嫌の悪くなつたお母さんは、私の背中をバシンと叩いて家から送り出した。

お気に入りのバレエシューズをはいて、走る走る走る。

でも、汗はかかないよう元気をつけながら。

化粧が崩れるのは、やつぱり嫌だもん。

駅前につづり、大きな時計台のところに背を凭れさせ、拓也は立っていた。

「拓也！」

私の声で気が付いて、拓也もゆっくりと私の方へと歩いてくる。

「「めんね、遅くなっちゃって」

大きな時計台の長い針は、もうすぐ四を指そうとしていた。

息を整えながら、少し乱れた髪も整える。

幸い、カチューシャのおかげでそこまで乱れではないなかったけど。

「尚美、お前遅えよ」

「だから「めんってー」

笑いながら言う拓也を見て、ホッと一息。

怒つてはいないみたい。

「尚美」

「ん？」

じつと、私を見る拓也。

「どうしたの？」

きっと、いつもと違つてこの女に少しづびづぶしてくれてるのかもしれない。

可愛いねって、やつ言つてくれるかもしれない。

「何か、付いてる？」

一応言つてみる。

につくりと、女の子らしい笑顔を作つて。

「こね。」

「え？」

「イモムシついてんぞ、肩に

・
・
・
は
い
?

おそるおそる肩の方を見る。

そこには、可愛い可愛い灰色のイモムシちゃん。

「さあ——取つて取つて取つて！」

さつきの女の子らしい笑顔は何処へやら。

「あーとつてやるから暴れんなー。」

結局いつもと変わらない始まり。

待ちに待った土曜日のデート。

滑り出しは最悪です。

イモムシがとれて一段落ついた拓也と私は、早速映画館へと向った。

この辺りでは一番大きな映画館。

収容可能人数もかなりのものというのが売りなのだけれど。

チケット売り場には既にものすごく長い列。

「なあ、どうする

その光景を目にした拓也が言った。

この映画館は、今では珍しく指定席じゃないから、長い間列に並んで待たなければならぬ。

「どうしよう。やめとく。」

「……やうだな。ゲーセンでもいくか」

やつまつと方向を変える拓也。

私もそれについていく。

「あの、『めんね？』

「え、なんだよ、急に」

いきなり謝る私に、拓也は不思議そうに首を傾げた。

そろそろ十一時といつともあり、だんだんと街が賑やかになつていく。

「あー、だつて」

「あれー、拓也くんじゃなーー?」

突然のその声に、同時に後ろを振り返る拓也と私。

聞きなれた猫なで声。

そこには、私服姿の柴山さんが大きな紙袋を手に立っていた。

「！」とな所で会つなんて超ぐうぜーんー！」

そういうと柴山さんは嬉しそうに拓也の腕に抱きついた。

「よつ。柴山、買い物？」

もつ慣れてしまったのか、それに対しても全く動搖しない拓也。

会いたくない奴に会つてしまつた。

「うんー…どうしても欲しいキャラ://があつてねー拓也くんは、なんで富崎さんなんかといるの?」

富崎さん『なんか』つていうのがどうもひつかかるけど、敢えて何も言わない。

「今から一人でゲームセン行くんだよ」

「いいなー・マリも拓也くんと遊びたーー!」

言いながら更に強く体を引っ付ける柴山さん。

柴山さんが現れた時点で予想はしていたけれど、流れは最悪な方向へと向つている気がする。

「ねえ、マリ今から暇なの。一緒に遊んじゃダメ? 拓也くん

くるつとした大きな瞳で拓也を見上げる柴山さんは、やつぱつとくく可愛くてい。

やのとおり、ふと柴山さんも皿のワンピースを着てこねじに咲付く。

私と回じよハーフームジヤケシトをひつかひて。

その格好はほとんど私と同じだったけれど、私よりもスタイルがよくて、髪もふわふわに巻いて、顔も可愛い柴山さんは、鏡の中の私なんかよつずつとずつと魅力的だった。

『拓也くんと面会せんつて、本物笑えるくらに釣り合つてないんだもん』

いつかの、柴山さんの言葉が頭の中に響く。

『あなたは拓也くんにはふれわしくない』

真っ白なワンピース。

こんなのが、着てこなきやよかつた。

「あー、柴山、」

「あのやー。」

何かを言いかけた拓也を私の声が遮る。

そんな私に驚いたよつこ、拓也と柴山は同時に「ひかりを見た。」

「あの、ね、私、急用思い出しちゃったんだよね」

「は？」

「だから、ゲーセンには拓也と柴山さん一人で行つてよ」

私の言葉に、明らかに怪訝な顔をする拓也。

「尚美、お前何言つて」

「じゃ、もうこいつとだからー。」めんねー。」

「おーー。」

呼び止める拓也の声を背中に感じて、私はの方へと走り出す。

その場を離れるとき、ちらりと笑った柴山さんの顔が見えた気がした。

走って走って。

朝よう走って。

「・・・ややつー。」

そしてこけた。

「こつ、た・・・」

受身を取り損ねて、見事に膝で着地。

ゆっくりと体を起こすと、膝からは真っ赤な血がじわじわと滲み出てきて。

初めて着たワンピースも、小さな砂利に引っかかって、見事に破れてしまった。

「もうやだ・・・」

咳きながら、乱暴にカチューシャを取る。

ほひ。

もうこれで、いつもの私。

がんばつてお洒落なんかするから。

慣れない化粧なんかするから。

拓也に可愛いつて思つてもらいたいなんて、そんな無謀なこと考えるから。

「かっこわる・・・」

地べたに座り込んだまま動けない。

足も痛いし、手も痛いし。

心も、やがて痛い。

「うひ、うう・・・」

全てが血無し。

泣いてしまった今、化粧だつて血無し。

黒い涙が、ほたつと白いワンピースにしみをつくつた。

この日を、すごく楽しみにしてた。

いい日になればいいって、本当にそう思つてた。

だけど、いじつてしまつたのは、全部私の所為。

鞄が見つからなかつたことから始まって、遅刻したことで映画は見

れなくて、拓也を柴山さんに渡して終る。

「せんぶ、ぜーんぶ、私の所為。

といひん、私つて馬鹿だなつて思つ。

「あー、もう、馬鹿馬鹿馬鹿」

「誰が馬鹿だよ」

いきなり声がして、びっくりしながらも振り返る。

「え、なんで」

「何俺置いて先に帰つてんだよ。てか、お前に急用とかねえだろ、

万年暇人野郎」

拓也は言ひながら私の前にまわり、しゃがみこんだ。

「おまえ、しけた?」

「・・・」

「どうせーな。たぐ。膝、血出でんじやねえかよ」

痛々しそうに私の膝を見ると、拓也は私の手をとつ、ゆっくりと立たせた。

「歩けるか?」

「うそ、たぶん」

拓也の腕が、支えるように私の肩に回る。

「顔もぐしゃぐしゃだし」

「・・・」

「とにかく一旦帰つて、消毒して」。それからまた何処でも行け
ばいい

「え？」

拓也を見ると、優しく笑っていて。

「さつき俺が柴山に断りつとしたのにお前は。俺言つただろ? 一人で出かけようつて」

「・・・でも

私の小さな声に、拓也はぎゅっと私を更に引き寄せた。

「映画が見れなかつたのはお前の所為ぢやない。柴山に会つたのだから、ただタイミングが悪かつただけだ」

「拓也

「それから!」

今まで私の方を向いていた拓也は、顔を前に戻して言つた。

「今日のお前、まあ、か、か、可愛かつたから!」

その途端拓也は、耳まで真っ赤にして。

それを見た私も、顔が熱くなるのを感じて。

「・・・ありがとう」

やつらの精一杯だった。

もうすぐお昼の外は、影はほとんど無くて。

小さな公園からは、蝉がつるつると鳴いている。

肩に回された手は、まだそのままで。

そこから伝わる熱は、やっぱり私を溶かしてしまった。

痛む膝と、涙で乾いた顔。

周りから見ると悲惨な私。

だけど。

今私は、きっと誰よりも幸せ。

15・王子と乙食

昨日終業式が終って、さあ夏休みー!っていきたことじゅうだけ。

高校生には夏期補習ってのがあるんですねー。

早速今日から一週間、みつちつと一日三時間ずつ予定が組まれてい
て。

私は今、つるるとい蝉の鳴き声の中、痛い日差しをつなげて、
のつそのつそと歩いている。

「あつーーー

空には大きな入道雲。

輝く太陽は休むことを知らず。

お口様大好き向口薬ちやんも、この暑さに完璧に干上がっていた。

一人文句を呟く私。

それも蝉にかき消されて、自分自身にも聞こえたか聞こえなかつたわからぬ。

まだ八時といつゝの時間、影は自身の半分の長さも映してはいなかつた。

「なーおーみ！」

呼ばれて声のした方を振り返ると、裕子と亞理紗が仲良く駆け寄つてきた。

「おー、おはよー」

「おはよ。 今日も暑いねー」

言ひながらマニーちゃんのうちわをぱたぱたと動かす亞理紗。

ぱつちりメイクの裕子とは正反対に、亞理紗は軽くリップを引いているだけ。

色の抜いていない真っ黒な長い髪に、赤い唇がよく映えていた。

「今日一時間目なんだつけ？」

「生物ー」

喋りながら歩き出す。

裕子を真ん中に、三人並んで。

「生物って・・・補習までして何やんだよお」

「遺伝だつて」

「げー」

勉強全般が嫌いな裕子は、本気で嫌そうな顔をする。

「遺伝とか。私全然わかんないんですけど」

「苦手な人多いって先生言つてたもんね」

「私たち全員文系だから、理科とか数学は得意じゃない。」

裕子だけじゃなくて、私だって遺伝なんてわからないわよ。」

組み換え値とか判性遺伝とか。

文系だから用語を覚えるのは得意ですけどね。」

じつとりと制服が背中に張り付くのを感じながら、大きく開けられた校門を抜ける。

うねる様な坂を上り、グラウンドの端に沿つたピロティーを真つ直ぐ行くと、校舎に続く造りになつていて。

朝から練習している野球部やテニス部を横目に、私たちはピロティ

ーを歩いていた。

「あの」

後ろから声がして、三人同時にぴたりと止まる。

一瞬私たちが呼び止められたのかどうか分らなかつたけど、前に続くピロティーには誰もいなかつたから、私たちで合つてゐるんだと確信した。

振り返ると、背のスラリと男子が一人立つていて。

「ごめん、急に呼び止めたりして」

謝りながらゆつくり歩いてくる彼に、私は見覚えが無かつた。

「あ、いえ、別に大丈夫ですけど」

裕子が不思議そうに応える。

亞理紗も大きな目を不安そうに揺らしていく。

「どうやらいの一人も知らないらしー。」

「あの、どうしたんですか？」

亞理紗が恐る恐る口を開いた。

わざわざまで動かしていたうちわは、今はもうぴたりと止まっている。

「あ、うん、あのそ・・・」

何かを言おうとして口ごもるその彼を、私は少し観察してみた。

長い前髪はセンターで分けられ、後ろは遊ばせるように軽く跳ねさせていく。

金に近いほど色の抜かれた髪は、太陽に眩しかつたけれど、色白といつこもあり、どちらかといえば爽やかな印象を与える。

目は切れ長で綺麗な形をしていて、鼻筋もスラリと通っている。

うん。

「もしよければ、俺と付き合つてもいいかな

「あの

決心したかのように、さっきより少し力の入った声を出して、その彼は裕子でも私でもなく、亞理紗の方を向いた。

「俺、河本祐樹っていうんだ」

いきなりの自己紹介に少し驚いたような亞理紗は、黙つて続きを待つた。

河本。

どこかで聞いたような苗字だ。

河本祐樹は、強い眼差しとは逆に、優しい口調で続けた。

230

それはとても紳士的で。

サマになつてゐるといふの無い告白シーンだった。

当然、亞理紗は途端に白い類を真つ赤に染めて。

口をパクパクしている。

「うこうのが、乙女つていうんだらうね。

「お、祐樹じやーん

聞き覚えのある声が河本祐樹の後ろから聞こえてきて、全員がそちらを向いた。

そこには。

「あ、河本！」

未来のビッグピアースト」と河本聰と、もう一人知らないヤンキー

が、手を振つてだらだらと歩いてきていて。

「よひ。また会つたな、マナイタ

私に気が付いた河本聰は、面白がりながら笑つた。

「マナイタじゃないつてばー！」

言い返してみて、気がつく。

河本祐樹。

河本聰。

苗字が同じなのは、二二つのことだつたんだ。

「お？まさかお前、いつも話してたカワイ子ちゃん？といついつか
けた？」

河本聰の隣にいたヤンキーは、楽しみを見付けたかのよう輝かせて亞理沙を見た。

「おーー・マジに可愛ーー。」

短い眉と襟足だけ伸ばした黒い髪が、どことなく威圧感を感じさせた。

河本聰と親しそうなところを見ると、この二人も三年だと分かった。

楽しそうに笑うそのヤンキーとは反対に、亜理沙は怖いのかかすかに震えている。

「光太、怖がつてゐるだろ」

それに気付いた河本祐樹先輩は、静かにそいつに言つて、亜理沙に「ごめんね」と謝つた。

「悪い悪い。俺、田中光太つつの。よへじへ

二カツと笑つた顔は何処か幼いよりも感じられて、亜理沙も少し安心したようだつた。

「で、そのカワイコちゃんの名前は何て言つただよ

「あ、わ、私、国本亞理沙つてあります」

河本聰の言葉に、慌てて亞理沙は名前を言った。

「亞理沙ちゃんつていうんだ? 可愛いね」

河本祐樹先輩はそう言つて優しく微笑んで。

その綺麗な笑顔に、亞理沙はまた頬を赤く染めた。

「てか尚美、その茶髪の人と知り合いなの?」

何氣無く聞いてきた裕子。

早い話の流れに、イマイチ着いていけていないうだ。

「うーん、知り合いつていうかなんというか」

「河本聰つつーの。ヨロシク」

私と出会った時とは違つて、河本聰は裕子にニーッコリと笑つてみせた。

「…裕子は胸が大きいからだらうか。

「え、河本？」

名前を聞いて、裕子は河本聰と河本祐樹先輩を交互に見た。

「俺たち、苗字一緒なんだ」

でも兄弟とかじやないから、と付け加える河本祐樹先輩。

「ややこしから下の名前で呼んでくれていよいよ

河本聰と河本祐樹。

うん。

確かにややこしい。

「あのや、もしよかつたらメアド交換しない?」

「え?」

「駄目かな?」

不安そうに目を細める祐樹先輩に亜理沙はブンブンと頭を横に振ると、スカートのポケットから//ニイのストラップが付いたピンクの携帯を取り出した。

「あ、ずつりー!」

それを見て、光太先輩もポケットから携帯を引っ張り出す。

「もう既で交換しちゃおーぜー!」

携帯を開きながらのその提案に、祐樹先輩は明らかに嫌そうな顔をしたけど、結局その後私達も携帯を出してメールアドレスを交換した。

河本聰、河本祐樹、田中光太。

新規登録された三人のアドレス。

まさか聰とメールアドレスを交換するとは思にもよらなかつた。

それぞれが操作し終えて携帯を閉じた時、丁度予令のチャイムが鳴つた。

「『じめんね、時間どりせぢやつて』

「あ、いえ」

また連絡するねと言つと、三人は三年の鞄箱の方へと歩いて行つた。

その時、聰は私に「またな、マナイタ」と言つて。

多分携帯のアドレス帳にも『マナイタ』で登録されてるな、と思つた。

「ねえ

教室に向かう途中の廊下で、裕子に肩を叩かれる。

「ん？」

「亞理沙見て」

言われて亞理沙の方を見ると、完全に上の空だった。

ぽーっと明後日の方向を見ている。

「あー、自分の世界に入っちゃってるね」

「どうする？」

「何が？」

別に自分の世界に入ってしまったも、あんなに素敵な人に告白され

たんだから仕方ないんじゃないかな。

「尚美、忘れたの？」

「え？」

私の間抜けな反応に、裕子は呆れたといつうに眉を寄せた。

「仲川」

「仲川？」

仲川。
仲川俊。

その仲川がどうしたと、

同じクラスで結構仲の良い男子で、拓也とともによくつるんでいた。

「あ」

思い出した重要な事実。

「仲川、ピンチじやん…」

私の言葉に、こぐれと頷く裕子。

亞理沙は相変わらず上の空。

「どうしたの…」

あの仲川の脳天気な顔が頭に浮かぶ。

祐樹先輩にはとうてい敵いっこない。

仲川は、ずっと亞理沙のことが好きだったんだ。

もんもんとした気持ちで、一年B組の教室に辿り着く。

ああ、本当にどうするべきか・・・。

「はい、ではキムタクのモノマネをするホリやつまーす」

ドアを開けた途端、まさに問題の仲川俊の、やつぱりノーテンキな声が耳に入ってきた。

「『ちよ、ちよお、待てよお』」

「似でねーぞー」

「まほせまほ

入り口付近の席で、大して上手くないモノマネを見て笑っているのは、拓也と西田。

亞理紗が先にふらつふらつと教室に入つていき、その後裕子と私が続く。

その馬鹿三人の傍まで行くと、裕子は、コマネチをし出した仲川の頭に、バフン！と鞄をぶつけた。

「こつてー！」

「さよー、中間、加藤」

「尚美、今日遅かったじやん」

痛みに床にしゃがみこむ仲川は軽く無視し、拓也と西田が声をかけてきた。

「まあ、ちゅうとな」

「てか、仲川」

「なんだよー、この凶暴女」

まだうつすらと皿に涙を溜めて、仲川はゆうべつと立ち上がる。

「いいこと教えてあげる」

「いいことだー?」

まだおふざけ半分だつた仲川を、裕子はギロリと睨んだ。

その視線に、仲川だけじゃなく、拓也も西田も真剣な面持ちになる。

「な、なんだよ

「あんた、亞理沙のこと好きでしょ」

突然の裕子の言葉に、仲川は途端に顔を真っ赤にした。

「なななななな、何言つてんだよ? !」

噛みまくつた上に、最後は声が裏返る。

ほんと、分りやすい奴だ。

「早くしないと、亞理紗とられちゃうわよ」

慌てふためく仲川にかまつ」となく、裕子は強い眼差しのまま言つた。

それは、なんの感情もこもっていないような冷たい響きをもつていたけど、それが余計に、裕子の真剣さを表していた。

「は？」

裕子の言葉に、ぴたりと動きを止める仲川。

「てか・・・国本は？」

拓也の言葉に、裕子は何も言わずに亞理紗のほうを見た。

その視線の先を追うようにして、男子三人も亞理紗の方を向く。

やつぱりぱーっとしたまま、亞理紗は席に座つていて。

「なんか、様子いつもと違うくなー？」

西田が言った。

「三年の河本祐樹。亞理紗、その人にさつめられたのよ

裕子の言葉の後、一瞬の沈黙。

「え、えー?...」

それを破つたのは、やつぱり仲川で。

「う、嘘だろ?...めじ?...悪い[冗談だろ?...」

「うな[冗談言つてびーすんのよ、ばーか」

裕子の応えに、仲川の顔色がサーっと変わっていく。

「因みに、あんたなんかより何百倍もかっこいいから。祐樹先輩」

「ゆ、裕子」

更に追い詰めをかける裕子に、さすがに仲川が可哀想になつた。

「俺、ビーしたらいいんだよお

がつくりと頃垂れる仲川に、私たち四人は顔を見合させて。

拓也は、困ったように腕を組んだ。

「仲川、元気出せよ」

「モーだよ、元気出して」

「これは、拓也と私の言葉。

「てか、お前に国本は高嶺の花すぎたんだって」

「今度は自分と釣り合ひ子を好きになればモーじゃん」

「これは、西田と裕子の言葉。

その言葉に、更にダメージを受ける仲川。

「ちよ、ちよっと二人とも!」

「仲川、できるかぎり俺たちも協力するからさー。」

必死な拓也と私の間に、仲川はやつくりと顔を上げた。

「木高、高崎・・・」

うつすらと涙を溜めている仲川は、まるでチワワのベーカンみたいで。

私は思わず、祐樹先輩の方が男らしいな、と思ってしまったのだった。

16・星のない空

16・星のない空

今テレビの中では、人気のお笑い芸人たちがコントを繰り広げていた。

お笑いは結構好きだから、夕飯を食べ終わつた後は、決まって家族三人でテレビを見る。

つぐづぐ仲の良い家族だと思つよ、ほんと。

食後のコーヒーを片手に、ゆつたりとソファーに包まれて。

これを至福の時と言わづ、いつをさう言つのだらう。

何組めかのグループが終つて、番組が一旦CMに入った時だつた。

「尚美、なんか鳴つてない？」

「え？」

お母さんに肩を叩かれて、テレビの音量を少しふざる。

確かに、何か鳴っている。

更に音量を下げて耳を澄ませると、それは私の携帯の着メロで。

「私の携帯だ」

そう言いつと私は、まだ少し「コーヒーの残っているマグカップをテレビの上に置いて、駆け足で自分の部屋へと向った。

切れる一歩手前だったと思つ。

部屋の電気のスイッチを叩くよつにして押した後、机の上で音楽を流しながら震えている携帯を引っつかんだ。

「もしもしーーー」

『むしむし』

聞こえてきたのは、拓也じゃない男の声。

ディスプレイを見る前に通話ボタンを押したため、それが誰のもののかがわからない。

「え、あの」

『俺だよ、俺

「え？」

『だから俺だって』

『惑つ私と、苛ついてくる男。』

『俺』でわかるんだつたら、声聞いた瞬間に誰かわかるつーの。

「すみません、間違こじや、」

『あー！だーかーらー！俺！聰！河本聰だよー。』

いきなり大きくなつた相手の声に、反応し切れなかつた頭がグワーンと痛んだ。

聰。

河本聰。

「あ、あんたか！」

これは顔と名前が一致した瞬間。

頭の中に、今朝も見たあのムカツク顔が浮かんだ。

『わかるのむせーし。マナイタ』

「はあ？あんたがさつせと名乗らないから悪いんでしょーがー！」

『表示されるだろ。まさかお前の携帯にはディスプレイないのかよ。』

簡単携帯かよ

「ティスプレイくらいありますー。カメラもついてますー。」

私の反応を鼻で笑う聰。

うん。やっぱり夜も超むかつく。

「で、何の用よ」

ベッドの上にぽつりと座る。

丁度ベッドの頭の上にある窓のカーテンを少し開けてみたけれど、星はやっぱり一つも見えなかつた。

『今週の日曜』

聰の声が、静かに響く。

『ドリームパークいくから』

「・・・はい?」

意味が分らない。

と云ふが、付いていけない。

『だから予定 Irene んなよ』

『 』 も当たり前のよつに聴は言つた。

「ちよつとちよつとー待つてよー、さういこうよー。」

じやあそこのうことだから的なことを言つて電話を切りつとした聴
を、私は急いで引き止める。

『は? 分かんねえのかよ。だから、田羅に』

「いや、だから、なんでそいつことになつてゐるの?ー。」

明らかにズレた答えをかえしていく聴に、心のなかで「このスカタ

ンー」つて罵つておぐ。

もつともな説明を再び求める私は、気付けば携帯を両手で包むよつにして持つていた。

『・・・ううせえなあ。んなのどーでもいーだら。とにかく、決まつたんだから。絶対来い。来なきゃシバぐ』

とても女の子にこういった台詞じゃないような気がするんですけど。

ていうか、全然説明になつてないんですけど~!

「でも、まあ私は置いておいて、裕子や亜理沙が予定空いてるかどうか分らないじゃん」

『あー、それなら多分大丈夫』

確信のあるよつな、そんな言い方。

「なんでそんなことが分るのよ」

『だつて、一時間くらい前に、祐樹と光太がメール送つて確認したから』

あ、なるほど。

確認したんだつたら、本当に一人の予定は大丈夫・・・つて、

「なんで私にはその確認のメールがこなかつたのよ?...」

おかしいよね?

普通におかしいよね?!

『あ? だつてお前、どうせ暇だろ?』

間違つたことは言つてません的なその言い方に。

まず根本的に何か間違つてこむつの気がするけど。

予定が空いているのは事実なので、結局何も言い返せない。

『じゃ、それだけだから。また詳しいことはメール送るわ』

せつ言つと、ぱいぱいも言わずに奴はブチリと電話を切りやがつた。

今聞こえてくるのは、プープーという無機質な機械音だけ。

電話を耳から離し、せつきの強引な約束にため息を吐きながら、私は携帯の電源ボタンを押した。

ドリームパーク。

それは、結構大きなテーマパークで。

サンダーといづジョットコースターと、大きな観覧車が人気らしい。

決まつてしまつた、日曜日の約束。

今日は木曜だから、あと二日後。

これは多分、ものすごく仲川を不利にする。

亞理紗と祐樹先輩が親しい仲になってしまった、きっと仲川に勝ち田はない。

さあ、どうするべきか。

手を顎に添えて、視線を上に巡らせる。

何か、いい案はないか。

仲川にできる、祐樹先輩に負けない素晴らしいこと。

必死で考えていると、ふと机の本棚にさわっていた一冊の本に田がとまつた。

その背に指を掛け、両隣の本が落ちてこないよう手をさながらゆつぐつと引つ張り出す。

少し埃のかぶったそれは、でもまだ新品同様に綺麗で。

表紙には、可愛らしい沢山のフルマスクの写真。

初めてでも簡単！作ろう！簡単マスクシート

表紙に書かれた大きな文字。

それを見た瞬間、私は思わず喜びの声をあげた。

「これだー！」

これなら、仲川にだつてできる。

祐樹先輩に勝るかどうかは分らないけど。

フェルトでマスクシートを作るへりになら、きっと絶対上手へりへー！

私は早速その本を鞄に入れて、明日にでも裕子たちに相談してみようと思った。

17・フェルトでガンバ（前書き）

更新遅くなってしまってすみません。

17・フェルトでガンバ

17・フェルトでガンバ

「おはよー尚美」

ガラリと教室の扉を開けると、拓也と、拓也の席に集まっていた裕子と西田が私に朝の挨拶を投げ掛けってきた。

私は鞄を持ったままそこへ走り寄る。

「おはよー！仲川は？！」

朝から顔を輝かせる私に、三人は不思議そうに顔を見合せた。

「あそこにいるけど」

拓也が視線を向けた先に、仲川の席があり。

仲川はそこで、机の上に死んでいるように伏せていた。

「来てからずっとあの調子。亞理沙のことにかなりダメージ受けてるっぽい」

少し心配がついで、裕子。

西田も仲川の方を向くと心配そうにため息を吐いた。

「それなんだけど、いい考えがあるのー。ちょっとこれ見てー。」

私は一人明るい声を出して鞆からあの本を取り出した。

机の上に置くと、三人ともが「何これ」というような顔をする。

「フルートで、マスク…？」

「そうー。これなら簡単だから仲川でも出来そうだし、ナイスアイデイアだと思わない?ー」

私の声を聞きながら、裕子はパラパラと本を捲つて。

「まさか、仲川がマスクコット作って、それで亞理沙を釣りつって考
えじゃないでしょ、うね？」

「え？ そつだけど」

予想外に冷めた裕子の反応に、首を傾げる。

私の返答に、裕子は「やつぱりな」と言いながら本を机の上に戻し
た。

「いい？ 恋愛未経験者」

裕子がぴしりと指を立てる。

「な、なによ」

恋愛未経験者という言い方に少し引っかかるけど、そこは敢えて触
れないでおこう。

「今どきね、手作りのマスクコットなんかで、誰もときめいたりしま
せん」

裕子の指摘に、思わず反論する。

「へ、そんな」となごよー。」

「そんなことがあるのー逆にウザこって思ひ方の方が多いんじゃない？」

私たちのやつとつを、拓也と西田は静かに見ていて。

巻き込まれたくないといつ考へが、黙つていてもよくなつてきた。

「で、でもー裕子、ちよつと思ひ出しちみてよ」

「なごよー。」

眉を寄せる裕子。

「」の前、私と裕子と亞理紗の二人で、西田されるなじみの風がいいから、結構盛り上がつたときあったでしょ？」

それはたぶん今から一週間ほど前。

期末テストが終った辺りだったような気がする。

「あー、あつたわね。そんなことも」

「その時、亞理紗なんて言つてたか覚えてる?」

「えー、亞理紗が?えつと・・・」

思つて出やつと田を廻る裕子にかまわず、私は話を続けた。

「亞理紗あの時、『デラマみたいのがいい』って、そう言つてた

「デラマ・・・あーやつ言つてたかも」

「だから、『告白は、夕方の海で好きだつて叫ばれてみたい』って

「やうだつたそだつたー私その時ちよつと引いたもん!」

「でしょ？ーーい？よつするこ、アリサはものすいーー夢見る乙女なわけ」

今度は私が指を立てる番。

びしりと、自信を持つて人差し指を立てた。

「・・・うん」

「へー」とは、他の女の子がウザいって思ひへりこのことが、アリサには一度いいと思わない？

自信に満ち溢れた私の視線を逃れるように、裕子が下を向いて。

「・・・うかも、しれない、わね」

裕子の返答に、私は思わずガツツポーズ。

形勢逆転。

私の勝ちである。

「よし、じゃあマスコットで決まり、だよな？」

拓也が顔合戦を見計らい、つまづまとめる。

西田も、ようやく会話に参加する姿勢に戻つて。

「マスコットで決まり。・・・でも、」

「でもって、まだ何かあるのかよ」

途端に顔を曇らせる私に、拓也はがくりと顔垂れた。

「今週の日曜にドリームパーク行くから、かなりそれで仲川は不利になると思つ

私の言葉に、拓也と西田は顔を見合せた。

「なに、国本、もつそんな約束したのかよ」

西田が少し驚いたように言った。

「結構強引な約束だつたんだけどね。でも大丈夫！私と尚美がちゃんと邪魔してくるから」

「は？」

裕子の言葉に間抜けな声をあげたのは拓也。

怪訝そうに眉を寄せている。

「なんでそこで尚美と中間が出て来るんだよ」

拓也の問い掛けに、裕子はにやつと口の端を上げて。

「だつて。私も尚美も誘われてるもん。向こうが三人組だからね」

それを聞いて、今氣が付く。

西田や仲川、そして拓也も、私たちがそれぞれ三年三人組とメール

アドレスを交換したことは、まだ知らないのだ。

だつて言つてないもん。

「尚美、そんなこと聞いてな

キーンゴーンカーンゴーン。

ぐるりと私のほうを向いた拓也を遮るようにチャイムが鳴る。

なんとなく拓也の機嫌が悪そつたので、私は軽く笑つて逃げる
ように席に着いた。

三時間の補習が終つて。

「仲川ー」

裕子と私は、まだ死にかけている仲川の席まで歩いていく。

「・・・おひ

私たちに気が付き、仲川の力のない声が返ってきて。

裕子は思わずバシリーと仲川の背中を呴いた。

「しつかりしなさい！私と尚美は、あなたのことを助けてあげようと思つて、今ここにいるんだから

裕子の言葉に、私も頷く。

「いい？あなたは今日からフルトでマスクを作るのは

いきなり何の」とやが、仲川の頭の上へマークが三つほど浮かぶ。

「あーだからねー」

痺れを切らしたように、裕子は続けた。

「あなたがマスクを作つて、それを告白と同時に、理紗にプレゼントしようとこうわけ！わかる？」

わかる? と一応疑問形で終つてはいるが、その言い方は「わかれ」と命令しているのとほとんど変わりはない。

仲川は、こくこくと頷いた。

「で、これ

私は、色とりどりのフェルト生地と裁縫道具を、ドンと机の上に置いていた。

因みに裁縫道具は、中学で使っていた四角いキティちゃんのやつ。

「必要なものは一応揃えてきたから。作り方もできるかぎり教えるつもりだし、とにかく頑張ろ!」

「ね!」と仲川の肩を軽く叩くと、仲川は私たちの顔を交互に見比べて。

「お前ら……いい奴だな……!」

やつぱり軽く田を潤ませる仲三に、裕子も私もひょっとしてたけべ。^{ビ。}

とにかくでも畠へマスクシートを完成させやうこけない。

「アーマルガムー。」

裕子のその一聲で。

早速私たちがマスクシート作りを開始した。

何を作るかだけ、それは亞理紗の大好きなマリヤちゃんに決定して。

適当にマリヤちゃんの型をフルトコロで描いていく。

私たちなりやうこつけめんだけ。

「ほい、仲三でしょ？」

モタモタとした仲川の手つきに裕子はイライラを募らせていたけど、これだけは仲川本人がやらなければ意味がない。

「できたー！」

仲川が喜びの声を上げたのは、もう夕方の五時半をまわった頃。

「遅いわー！」

私たちしかいなくなつた教室に、裕子の怒鳴り声が響く。

勘違いしちゃ いけない。

できたのはマリィちゃんのマスク Gottじゃない。

白いフェルトの、マリィちゃんの型描きだけである。

「まあまあ、初心者なんだから仕方ないって

宥める私も、さすがに少し疲れていた。

「いい？仲川。明日も忘れないで絶対そのフルト持つてくんのよ

裕子はやつ言いながら机の上を手で付け始めて。

今日はこれで終わりとこいつにならひました。

うーん。

亞理紗と祐樹先輩が付き合ひ前で、このマリィちゃんは完成するの
だろうか？

ちゅうと心配。

17・冷たい二日目1

朝、九時五十六分。

只今、ドリームパークのエントランスゲート前に、裕子と亞理沙と私の三人は立っている。

ついにやってきてしまった、日曜日。

仲川のマスクコット作りは、順調にいっているのかいないのか。

昨日よつやく頭の部分が完成した。

あ、まだのつぺらぼうですけどね。

ちらりと隣を見ると、裕子も亞理沙も、学校の時よりも大人っぽいメイクで仕上げていて。

裕子は、股下の短いグレーのパンツから、ゴールドのサスペンダーを垂らして、白い裸の女の人のプリントされたTシャツは、ぴたり

とスタイルの良い体に張り付いていた。

亞理沙はピンクのワンピースで。

白いミュールが、女子らしさをより引き立てていた。

二人とも、行きかう人の目を引くほど、綺麗だと思つ。

それに比べて私は。

メイクは軽くしてはいるものの、この前拓也と遊んだ時とは比べ物にならないくらい雑。

原色的なオレンジのTシャツとカーキのパンツという、なんともボーラーラッシュなこのスタイル。

おまけに胸も無いときた。

美人一人に挟まれた感覚。

私服でとなると、なかなかキツイものがある。

はあ、とため息を一回ついた時、

「あ、来たー！おーーーー！」アリスが叫ぶ。

裕子が大声を出して手を振つた。

見ると、あの三人組が優雅にこちらへと歩いてきていて。

河本祐樹先輩。

相変わらず眩しい金髪で、爽やかに手を上げる。

黒いズボンが、長い足を更に長く見せていて。

白のタンクトップの上に羽織られた淡い黄色のパーカーは、なんと
もいえないほど夏によく合つてた。

田中光太先輩。

私たちを見つけて嬉しそうに振るその手には、いくつものアクセサリーや

迷彩柄のズボンに黒のタンクトップという、なんとも光太先輩らしいファッショ n。

そして、河本聰。

白と青のボーダーのワイシャツにジーンズという、なんともラフな格好。

だけど、その鎖骨にはしっかりと髑髏のネックレスがギロリと光っていて。

長い茶色の髪は、かすかに吹く風に、さらりとなびいていた。

この三人。

悔しいけど、本当に無敵だと思つ。

いや、本当に。

そういうふんの女の子たち、皆彼らのこと見てますからね。

「「めんね、待つた？」

私たちのところへくるなり紳士的な笑顔を見せる祐樹先輩。

「いえ、全然大丈夫です！」

少し緊張気味の亞理沙が、胸の前で手をパタパタと振った。

上手く出合えたところで、さっそくチケット売り場へ。

少し長めの列ができていたけれど、すんなりと順番がまわってきて。

「何名様ですか？」

受付のお姉さんが綺麗な笑みを浮かべて聞いてくる。

「大人六枚」

祐樹先輩が答えるのと同時に、私たちは鞄から財布を取り出した。

えーと。

大人フリー・パスは、四千五百円か。

料金を確認しつつ財布を開けると、

「あーいーよ。お金は俺たちが払うから」

くるりと私たちの方を向く三三三人組。

「え、でも」

困ったような声を出す亞理沙。

裕子も私も、どうするべきか少し悩む。

「亞理沙はわかるけど、つちらほ、ねえ」

言いながら裕子が私に同意を求めてきて。

「裕子と私は、自分で払います」

私は再び財布を開けた。

祐樹先輩に好意をもたれている亞理沙は、確かに払つてもうつてもおかしくはないけど。

裕子と私は、別に光太先輩や聰にビビり思われているわけじゃないし。

千円札を四枚取り出した。

「あーもう一こいつつってんだから、いいんだよー。」

「あっ」

急に大きな声を出したかと思うと、聰はいきなり私の財布と四千円を取り上げると、四千円を財布の中に雑にしまい込んでしまった。

そして再び私の手元に返つてきました財布。

「おー、もうチケット買ったから。さつやと行くぞ」

聰はふつせんめいひて、じかじかしていった間に買っておわったチケットを一枚、私に押し付けるように渡して。

「あ、あっがと」

裕子は光太先輩から、亞理沙は祐樹先輩からチケットを受け取る。

私たちは仕方なく財布を鞄の中に戻し、歩き出した三年三人組に付いて行つた。

入り口を通り抜けるときに、フリー・パスの証となるベルトを腕につけて貰つて。

中に入ると、そこは外の世界とは全く違う、本当に夢のような光景が広がつていた。

「わー！」

小さな頃に数回来たことがあるくらいで、まったく記憶になかったから。

私は思わず声をあげた。

かぞえられないくらいの花が植えられた下段が、目の前にある大きな噴水をぐるりと取り囲んでいて。

いたるところに、小さなお店。

そこから、色々な風船がふわりと宙に浮いていた。

「ふつ。何そんなに喜んじゃつてんだよ。ガキだな、やつぱ」

少しの間夢の世界に浸っていた私を、いつもの憎たらしげ声が引き戻す。

「む。いいでしょ、私は感受性豊かな純粋な女の子なの。あんたみたいな、心の干からびちやつた不良野郎とは違うんですー」

「誰が純粋な女の子だよ」

鼻で笑う聴に、戦闘体勢に入る私。

「まーまー、一人ともー」

苦笑を浮かべてとめに入る亞理沙。

「ま、沢山乗り物あるよ。何から乗ろつか?」

裕子はパンフレットを広げて地図とこじめつ。

そんな裕子の隣から、光太先輩が一緒に裕子の広げていた地図を覗き込んで。

いきなり距離の近くなつた光太先輩に、裕子は少し驚いたように顔をあげたけど、何も言いはしなかつた。

「最初だから、空中ブランコとかからがよくね?」

言いながらポンと地図のある部分を叩く光太先輩。

それは、ここからそんなに離れていない所で。

「いいですね、そうしましょうか」

裕子は言いながら地図を置み、鞄にしまつ。

「じゃあ行こう」

祐樹先輩が言って、私たちは空中ブランコに向って歩き出した。

そのとき、祐樹先輩は亞理沙の隣を歩いて。

そつと、その手が亞理沙の肩に回ったのを、私たちは見逃さなかつた。

私たちがこうして此処にいる理由。

まあ、強引に誘われたっていうのもあるんだけど。

亞理沙と祐樹先輩の仲を邪魔するためでしょ？

私は裕子と目を合わせると、大きく息を吸い込んで、

「亞」

理沙と言おうとしたんだけど。

「・・・なこすんのよ」

裕子は光太先輩に、私は聰に腕を引っ張られて。

腕を肩に回され、がっちり捕獲されている状態。

「お前ひま、俺ひと

聰はニヤニヤと口の端を上げる。

「はー?」

「よーするし、祐樹と理沙ちゃんは別行動にしてあげましょーね
つてことー。」

今度は光太先輩が楽しそうに言つて。

なに馬鹿言つてんのよーつて怒りながら裕子は暴れたけど、その腕

「はー?！」

が解かれることはなくて。

「亞理沙ー！」

私の呼ぶ声も空しく。

私たちの異変に気付かない亞理沙は、祐樹先輩と共に、日曜日の遊園地という人ごみの中へと消えていった。

19・冷たい二田用2

19・冷たい二田用2

「だめ。圈外。ここほんと電波入んない！」

裕子の地団駄を聞きながら、私たちはさつきの場所より少し奥に進んだところにあるベンチに座っていた。

「諦めた方がいいって、裕子ちゃん。俺らは俺らで楽しく遊ぼーよ。」

能天気な声を出す光太先輩を、裕子がキツと睨む。

「里沙に何かあつたらジーさんによ」

わざわまでの敬語はびっくり。

裕子は携帯をポケットにしまつと、私の横にトントンと座った。

「裕子、もう仕方ないって。たぶん合流するのは無理だよ。」

何度も携帯に電話したけれど、いつもすぐに圏外になるし、かつたとしても次は亜里沙の方が圏外だしで。

連絡は全く取れない状態。

「安心しろよ。祐樹に限つていきなり手を出すとか、そんなへマはしねえから。」

「そりゃーだから裕子ちゃんも一緒に楽しもつよー。」

聰と光太先輩の言葉に、裕子は一回ため息をついて。

「仕方ない。今日は諦めるしかないかな。」

いっぱい食わされた悔しさは、やつぱりまだ消えてないけど。

裕子も私も、せっかく奢つてもらつたんだし、久しぶりのテーマパークを楽しむことにした。

で。

なんていきなりジョットコースター？？

ベンチから立ち上がりなんとななく歩き出しだ。

行き着いた先が、今並んでいる『サンダー』の最後尾。

「空中ブランコじゃなかったの。」

私が言つと、

「なに、お前ジョットコースター怖いの？」

やつぱガキだなと鼻で笑つ聴。

「べ、べつにそんなことないしー。」

「はいはい。」

私の抵抗は軽くスルーされて。

裕子は私の前で、光太先輩となにやら楽しそうしゃべつ中。うん。

すぐ近くにいるのに、完璧に分裂してしまった。

「ねえ、ほんとこれ乗るの？」

ツイツイと、聰のワイヤーシャツを引っ張る。

「やっぱ怖いんじゃねーか。」

「あ、そんな」と・・・ない、けど」

「けど、なんだよ」

下を向いた私の顔を、聰が覗き込む。

「・・・なんでもない。」

少しだけ様子のおかしい私に、聰は首を傾げながら体勢を戻した。

言えない。

言えない。

ジェットコースター乗つたこと無いなんて。

そんなこと、絶対言えない！

テーマパーク自体は何度か行つたことはあるんだよ。

でも、お父さんもお母さんも絶叫系が苦手だし。

友達と行つた時も、なぜかジェットコースターだけは乗らなかつたし。

人生初となるジェットコースター。

十七でジェットコースター初体験、なんて。

そんなこと、口が裂けても・・・

「なあ、光太。俺ら、やっぱこれ乗んのやめるわ。」

え？

悶々と心の中で格闘していた私は、突然の聴の「乗らない」発言に顔を上げた。

「へ? どうしたんだよ。」

光太先輩と裕子がくるつといちを向く。

「なんとなく。ジーハットコースターとか乗つたら髪型くずれるし。」

「髪型つて、お前相変わらずだな。」

「うるせー。」

一人のやりとりを、ぽかんと見ている私。

今一体、何が起こったというのだろう。

「あ、じゃあ、聰。」

光太先輩が聰のワイヤーシャツをぐいと引っ張り、耳元に何かを囁いた。

「あー分かったよ。じゃあ、俺行くから。」

何が分かつたといつのか。

裕子も私も、状況が上手く飲み込めない。

「ほら、マナイト。お前は俺といつち。」

「えつ、あつ、え?..!」

聴の行動に対応しきれない私の腕を、聴がぐいぐいと引っ張ついて。

離れないように持たれた手首は、ぎゅつぎゅつと歩くたびに少しだけ痛んだけれど。

足が縛れない様に、私は必死に聴に着いて行つて。

気が付いたら、あの長い列から少し離れたところまで来ていた。

「ねえ!聴!」

段々と歩調が遅くなつた頃に、私は言った。

「なんだよ?」

「なんでいきなり、ジョンストンゴースター やめようだなんて」

歩くペースはもう少しゆっくりになつていて。

知らない間に、聰の手は私の手首から離れていた。

「なんでだあ？」

「あ、うん。」

私の質問に、腕を組む聰。

「おー、マナイト。」

「な、なによ。」

私よりずっと背の高い聰は、私を見下すように手を組んで。

「お前、ジョンストンゴースター、やっぱ怖いんだろ？」

突拍子もないほど、ズレた内容。

「「、「怖くなんかな」って言つたでしょ？！乗つたことがないだけ
よー。」

相変わらず強がる私の言葉に、聰はフッと表情を和らげた。

「・・・あ」

それを見て、自分の失言に気付く。

しまつた。

「ジヨット」「ースター乗つた」となかつたのかよ」

「・・・うん」

その「」とに突つ込んでくる聰。

なんとなく恥ずかしくなつて、下を向く私。

「たく」

ほら。さつと馬鹿にされ

「アリーハーとは早く言へっての。」

「・・・え?」

顔を上げると、ポンと頭の上に手を乗せられて。

「強がるのも大概にしろよ。」

そのときの聰の笑った顔は、なんだかものすごく優しくて。

いつものムカつく奴からは想像できないくらいかっこよく見えて。

「あ、ありがと。」

私は、不覚にも頬が赤くなるのを感じた。

「うーじゃあ空中ブランコでもいくか

うーんと背伸びしながら言つ聴に。

「え？ 裕子たちは？」

当然の疑問をぶつける。

「は？ あー、あいつらは一人でまわりたいんだとよ。」

「・・・はい？」

さらりとした聴の言葉を上手く理解できない。

ていうか、理解したくないけど。

亜里沙と祐樹先輩で二人。

裕子と光太先輩で二人。

となると。

「私とあんた、二人でまわるつて」と？

なんとも言えない顔をする私を見て、聰は眉を寄せた。

「なんだ。不満かよ？」

いや、不満というか、なんというか。

そう、私が無意味に一人で悩んでいると、

「俺みたいな男前と一人で歩けるんだから、ありがたく思え！」

「わっ！」

そういつて聰はパシリと私の手首を再び掴んで。

「今日は楽しもうぜ。」

空中プランク田指して歩き出した聰に引っ張られるよつとして、私も足を動かした。

20・冷たい三田町3

20・冷たい三田町3

空中ブランコに乗った後、さぶるみ達のショーを見たり、他のアトラクションに乗つたりして。

お昼はパーク内のファーストフード店で済ませて。

それからまたアトラクションに乗つて。

時間が経つのなんてあつといつ間だった。

コーヒーカップ馬鹿みたいに回して皿を回したり。

お化け屋敷で無駄に騒いだり。

ムカツク奴だけど、聰といふと、なんだかすげく楽しかった。

「あ、見て。このネックレス可愛い」

空が暗くなつて、至る所がライトアップされ始めた頃。

たまたま通りかかったお土産やさんの前で、思わず足を止めた。

「ネックレス？」

私の見つめていたネックレスを、隣から聰も覗き込む。

それは、三日月の形をした、ゴールドのネックレス。

先端には、小さなトルコ石が埋め込まれていて、なかなか見ない組み合わせについて惹かれてしまったのだ。

「ね？ 可愛いでしょ」

じつとネックレスを見ている聰に問いかける。

お前には似合わねえよって笑うだろ？と思つたから、そりやつて真剣にそのネックレスを見ている聰が、少し意外だった。

「聴？」

なかなか動かない聴のワイヤーシャツを軽く引つ張る。

すみと聴はぱっと顔を上げて。

「おねーさん、この三田用のネックレスつけついだい

やつ聞いた。

・・・はい？

聴に浮ばれた若店員が店の中から出してくれる。

私のことは軽く無視して、その店員に五千円札を一枚渡す聴。

店員はおつりをとつてレジの方へこま、戻してくれる、一千円札一枚

と小銭をこくらか聴に渡した。

「袋にお入れ致しましょつか?」

「あ、」のまま結構です、

ありがとうございましたとこいつ声を同時に吸しながら。

また聴に腕を引っ張られる私。

もつねはすつかり暗くなつていて。

おおきな時計は、もつねぐへ時を描かうとしていた。

「聴?」

「聴?」

呼びかけても止まらない。

「最後にあれ乗るや」

「あれ？」

今向つている方を見る。

そこには、何色もの光でライトアップされた大きな観覧車がゆっくりと回つているのが見えた。

「観覧車？」

私がきくと、

「最後には観覧車つて。お決まりだろ？」

聰は振り返つて笑いながらそう言った。

もうすぐ閉園ということもあり、だんだんと人の少なくなつていくドリームパーク。

昼は込み合っていたレストランも、ガラス窓の向こうに見える席はがらりとすいていて。

だけど観覧車のところまで来てみると、若い男女で酷く込み合っていた。

聰と私が、観覧車待ちの列の最後尾に並ぼうとしたとき、

「聰ーー！ 尚美ちゃんーーん！」

列のずっと前の方から声がして、見ると光太先輩と裕子、そして亞理沙と祐樹先輩が手を振っていて。

私達はその四人の所へ割り込ませてもらつた。

「なんか久しごりーー」

そう言って笑う光太先輩。

その言葉に、裕子たちも笑う。

「なんかはぐれちゃつたね」

そう言つたのは亞理沙で。

まだ真相に気が付いていない様子。

そんな亞理沙のに、そ知らぬ風に相変わらず爽やかな笑顔を浮かべている祐樹先輩。

うん。

なにはともあれ、それぞれ結構楽しかったみたい。

大きな観覧車はいくつもコンテナがあつて、順番はすんなりとまわってきた。

まず亞理沙と祐樹先輩が乗つて、次のコンテナに裕子と光太先輩が乗り込んだ。

私たちにまわってきたコンテナはうすい青色で。

「足元にお気をつけ下さい」

ドアを押さえながらの係りの人の言葉を聞きながら、一步中に足を踏み入れた。

身を少しががめて、私の跡に聴も乗り込む。

その時

尚美！

「へ？」

名前を呼ばれたような気がして、ドアの向いを振り向いた。

だけど私の知っている人は誰もいなくて。

「どうかしたか？」

「ううん……なんでもない」

不思議そうな顔をする聴。

ゴンテナのドアは、静かに閉められ、チエーンが掛けられた。

21・冷たい二田四

21・冷たい二田四

ゆうくじと動くコンテナは、だけど確実に上へと回つていく。

「マイナイト

「なによ」

相変わらず変わらない私の呼び名。

むつ^正かのはこにやつて、半分諦めモード。

「動くなよ」

「くへ」

意味不明なことを言ひ、聴はれることは立上がりった。

そして、

「え？ なに？ え？」

ゆうくくりと私のほうに近寄ってきて。

戸惑つ私を他所に、聰はそつと、わざと買つたネックレスを、私の首に付けてくれた。

「・・・ネックレス」

それはかすかな光でもキラリと光つて。

「うふ。似合ひやん」

そう言つて静かに微笑む顔は、ジエット「スター」のあの時に見せた、やつぱりすく優しい顔。

「えと・・・お金、」

「俺が買いたくて買つたんだから。お前はそれ付けてくれてればいいんだよ」

外から入つてくるイルミネーションの光が、聰の顔をほのかに照らしていて。

そうか。

聰は私より一つ年上なんだつて。

なぜかその時初めて思った。

「あのや、私、

「分かってる。言わなくてても」

ゴンドラの少し曇つた窓からは、遙か下の何色ものライトが幻想的な光を映し出しているのが見えた。

それはとても綺麗で。

だけどなんとなく、少しだけ寂しかった。

「お前と裕子ちゃんが、祐樹のことを賛成してないってのは、朝から気が付いてた」

聰の視線は、決して鋭いものじゃなくて。

だけど、私から返り切れることもまた無かつた。

「別に、反対してるわけじゃないの。ただ…」

先を言おうか、一瞬迷う。

祐樹先輩側の聰に仲川のことを言ひてしまつて、仲川が不利にはならないだろうか。

「ただ?」

「…」めん、言えない

丁度つべんまで来た頃、上空の風に煽られて、「コンドリガギシリ」と音をたてた。

「祐樹先輩はかっこいいし、優しいし、すいへん良い先輩だと思つ。でもね、」

「いひつて。祐樹のことは祐樹のことだし。上手くいつてもいかなくとも、それは俺にはどうでもいい」

「聴…」

なんとなく、申し訳なく感じてしまつ。

「だけど、まあ、今日は悪かつたな」

「え？」

向かいに座る聴。

その「じめんが何に対してなのがが、よく分からない。

「何が、じめん、なの？」

「いや、結構無理矢理な所があつたしな。一日潰しちゃつたわけだ

し

聴の長い足が、狭い「ノハヅ」の中で窮屈に曲がられた。

私は意外な聴の言葉に、思わず吹き出しちゃった。

「ふつ」

「な、なんだよ?」

「だつて、『「」ねん』なんて、あんたには一番似合わない言葉なんだもん」

初対面で私をマナイタと罵り、なんでも自分中心だと思つてそういう聴。

その口から、「「」ねん」などと言葉がでるだなんて。

「俺はや」めで腐つてねーよ」

「うふ。やつみたいでちょっと安心した」

「お前なー」

呆れたよつな、困つたよつな、なんとも言えない風の聰を見て、私はまた笑つて。

そんな私を見て、聰もやつぱり笑つた。

さつさまで遙か下で揺れていた木々が、もひょんどうの恋を撫でていね。

「今日はあつがとつ」

三日月のネックレスが、ひんやりと鎖骨に冷たい。

「うううううう」

ヒーヒーヒと笑つた聰の顔を、もうすぐそこのネオンが照らす。

一度ギシッと大きく揺れてから、がらりとビードアが開けられた。

「おかえりなさーい。出口はこいつらとなつてます。足元、気をつけ
て御降り下さーい」

夜には不釣合いな明るい係り員の声が聞こえて、私達はお互いに視
線をドアの方へと向けた。

レディーファーストといつのだらつか、この時もやっぱり私が先にド
ンドラから降りる。

聴が降りてから、入り口の隣の通路を通り、観覧車の乗り場から
出た。

入り口の方には、もう二、三人しか並んでいなかつた。

「もう終わりなんだねー」

人の乗つていないうれーゴーランドが、軽やかなメロディに合わせ
て踊つてゐる。

ほとんど人のいない広場を、すぐそこで合流した裕子や亞理沙たち
とゆっくり歩く。

「一日が終るのなんてすぐだね」

「うん。 あつとこ「聞だつた」

夜空を見上げて、裕子と亞理沙が言った。

明るいネオンの所為で、星は一つも見えない。

「楽しんでもらえてよかったです」

優しく微笑む祐樹先輩の田は、やっぱり亞理沙の「」とを追つていて。

その隣で楽しそうに笑う光太先輩は、なんとなく裕子の「」とを見て
いるようだった。

隣を歩いていた聰の方をふと見ると、たまたま視線がぶつかり合つて。

お互い、静かに微笑んだ。

「尚美ー。」

突然名前を呼ばれて、ぴたりと足を止める。

他の誰も聞いたのだろう、全員が、ゆっくりとその場に立ち止まつた。

ゆっくりと振り返る。

「たく・・・や？」

何色ものライトの逆光で、黒い影しか見えなかつたけれど。

それは、もう見慣れた、私の大好きな人。

そこには、少し息を切らして、拓也が立つていた。

22・冷たい三田町5

22・冷たい三田町5

「拓也・・・なんだったの?」

信じられない状況が飲み込めると、私は拓也のもとへ駆け寄った。

「お前、観覧車乗るとともに浮んだんだ」

いつも付けてこむブラックのリストバンドで、拓也は額に浮かんだ汗を拭った。

「あれ、拓也だったの?」

「そうだったって言つてんだろ」

尚美!

ゴンドラに乗り込む時に聞こえた、あの声。

あれは、拓也の声だったのか。

てつかり聞き間違いだと思つてた。

「え、でもなご、拓也が此処に？」

自分よりも上にいる拓也の皿を見るため、少し顔を持ち上げる。

やつあると、拓也はポンと私の頭の上に手を置いて、いついついた。

「夜遅いから。ちよつと心配で迎えに来たんだよ」

優しく細められた瞳が、ネオンと一緒に私を映していく。

やうじつと、その中の私が揺れる。

「マナイタ。そこ、誰？」

「え？」

振り返ると、ゆっくりと聰が歩いてきて、私の隣で立ち止まつた。

じっと、聰が拓也のことを見る。

背は、聰の方が少しだけ高かつた。

「あのね、木高拓也っていうの

「どうも」

頭だけの会釈。

それには何の反応も示さない聰に、拓也の視線が鋭くなる。

睨み合つように佇む二人。

「拓也……？聰……？」

閉園のアナウンスが流れて、今まで流れていた音楽が静かなものに
変わる。

只ならぬ雰囲気に不安を感じ始めた時、フッと聰が拓也から視線を反らした。

「マナイト、後はそいつと帰れ」

「え？ あ、うん」

ジーンズのポケットに手を突っ込んで、聰は裕子たちの所へ戻つて行つた。

「あ、今日はありがとー! 楽しかった!」

私の声に、聰が振り返る。

「おう。 またな」

そう言つて聰の田は、まだ何処か拓也を見ているような気がした。

聰が戻ると、それぞれが私の方に手を振り、ゆっくりと出口の方へと歩き出して。

だんだんと小さくなる背中を、拓也と一人で見えなくなるまで見ていた。

「あれ、誰

拓也は、もう見えなくなつた聰たちの方をじつと見つめたまま言った。

「河本聰つていうんだけど、一〇上の二二年。拓也は、僕の初めてだつたんだよね」

側を、一組のカップルが通りすぎていく。

拓也は、一旦下を向いてから、私の方に顔を向けた。

「そのネックレス……」

キラリと、『ワールド』の二四用が首元で光沢を放つ。

「え？ あ、これ、今日聰が

「それ」

拓也の目が、夜の闇で微かに光る。

「全然お前に似合つてねーよ」

せりつと、生温い風か吹き抜けていった。

少し離れたところにあるお土産屋さんが、大きな音を立ててシャッターを下ろした。

「拓也……？」

「どうして、そんなことを言つたの。」

真夏の夜、不安で凍えそうになる。

拓也のその冷たい視線に。

息が止まつやうにならぬ。

「歸るぞ」

「わつ」

やつひつと、拓也は私の手首を乱暴に掴むと、大きな歩幅で歩を出した。

暗い夜道を、手を引つ張りられながら歩く。

ドリームパークを出ると、もうあの華やかな世界とはほど遠い、いつもの夜道が広がつていて。

青白い街灯の光に、数匹の蛾が舞つていた。

ぐいぐいと引かれる手首が、その度に鈍い痛みで痺れ出す。

私はなんとなく、ジョンストンースターのときの聰の手を思ひ出しだした。

あの時も、いつかって手首がぎゅっと痛んで。

足がもつれなによつに着いていくのが精一杯だった。

今、私が感じているのは、拓也の力。

誰よりも好きな、拓也の手。

いつもはもつと温かくて。

優しく私を包みこんでくれるの。

なの。

どうして今日は、こんなに苦しいんだろう?

歩き続ける拓也は、一度も私を振り返ることはない。

一人なのに、一人の時より、ずっとずっと不安だよ。

チャラランチャララン

暗い夜闇には不釣り合いな明るいメロディが、突然無機質に響きだした。

予想外のその音に、拓也も私も足を止める。

カーキのパンツのポケットで震える携帯。

「私のだ…」

私は携帯を取り出し、パカリと開ける。

明るいディスプレイには、『中間裕子』と表示されていた。

「はい、もしもし。裕子？」

『もしもし、尚美？聞いて！大変なのよ！』

電話越しで慌てる裕子の声が鼓膜を叩く。

何が大変なのか、よくわからない。

『今亞理沙たちと別れたんだけどね、祐樹先輩、亞理沙に明日家に来て欲しいって』

「え、あー、そうなの?」

『そりなの?じゃないわよ!それがどうこうとか、あんた分かってないでしょ』

ギヤンギヤンと割れる裕子の声。

ちらりと拓也の方を見ると、側にある街灯をぼんやりと眺めていた。

『明日亞理沙が祐樹先輩の家に行くってことは、亞理沙が祐樹先輩の告白を受け入れるってことなの』

「え?」

状況がよひやく把握できた。

明日、亞理沙は祐樹先輩に、告白の返事をしなければならなくなつたのだ。

『だから明日学校が終わるまで、仲川はなんとかしなきゃいけないってわけ！』

焦る裕子。

祐樹先輩に返事を返す前に、仲川は亜理沙に告白をしなければならない。

「でもマスコット、あの調子じゃ出来上がるのまだ先だろ？…」

いきなり迫ったタイムコモード。

良い案なんて、これっぽっちも浮かんでこない。

『仲川、どうすればいいの？』

眉を寄せる裕子の顔が、目に浮かぶ。

「わからない…明日亜理沙が返事をする前まで…」

マスコットが出来上がれば、と、言葉が續くはずだった。

「？」

『？尚美？…尚美？』

あまりに一瞬の出来事で、一体何が起ったのか分からなかつた。

いきなり強い力で電話を持っていた手を掴まれて。

拓也の方を向いた瞬間、私の唇は、拓也のそれで塞がれた。

『もしもし？！尚美？』

携帯から響く、裕子の声。

そつと唇を離すと、拓也は何も言わずに私の携帯の電源ボタンを出した。

途端に裕子の声が消え、静寂が訪れる。

「拓…」

今のは、一体なんだつたの。

頭が上手く回らない。

田舎、拓也から戻りや」とができない。

「あいつら……あんま闇わんなよ」

そう言つて、拓也は私の髪をサラリと撫でた。

その時の拓也の田舎、なんだか苦しそうに、少しだけ揺れていた。

うん。似合ひやん

『ハンマーの中での聰の優しい笑顔が頭をよぎる。

単純に嬉しかつた。

意地悪だけど優しい聰を、私は好きだと思つた。

全然お前に似合つてねーよ

冷たい拓也の瞳。

聰とは反対の、ずっと冷ややかなその聲音は、私を死なせてしまいそうだった。

ねえ、拓也。

拓也の全てが。

拓也の全てが、私を駄目にする。

だから今も。

さつきのキスで、頭がおかしくなった。

ねえ、拓也。

今は何？

私は、拓也にとつて何なの？

くろりと私に背を向けて再び歩き出した拓也。

私も、遅れないようここ歩き出す。

首元で一回、ひやりとい口元が揺れた。

23・マコイで遊ぶのせて

チャイムが鳴って、一時間目が終った。

礼と同時に、教室が一気にいるところとなる。

「仲川

席に座っていた仲川のところへ行くのが見えて、私も足早にそこへ向づ。

仲川は裕子と私の顔を見ると、何故かふいと視線を逸らした。

「び、びつしたんだよ。一人してや

机の上に置かれた手を見て、仲川が言った。

そのいかにも不自然な態度に、裕子と私は顔を見合せた。

「仲川、あんた、マスクってびつなってる?」

「昨日は田羅だったけど、ちやんと進んだ？」

土羅までに顔の輪郭ができたマリイちゃん。

昨日は、どのくらいここまでこつただろうか。

「あ、あー。それなんだけビセ」

机の上に置かれていた手をがばりと上げ、頭の上で組む。

仲川はぐるりとこちらを向いて、笑った。

「やつぱ男がマスクとか！ キモくない？！」

楽しそうな喋り声が響く教室の中、私達の周りだけが、なんとなくおかしな空氣になる。

その仲川の笑った顔は、なんとも間の抜けた、明るいのに、何処か違つものだった。

「は？」

何を言ひしるんだ?

「いやー、だからセー今どき手作りマスクとか貰つても、嬉しくなんかないっしょ?」

へりつとした笑顔はそのまま、裕子はその言葉に眉を寄せた。

「あんた・・・何言ひてんの?」

「えー?だからー男が」

「亞理沙ー今田もつてかれけやつわよー祐樹先輩にー.」

大きくはない、だけど腹の底から搾り出したような声で、裕子は机をバン!と叩いた。

「・・・え?」

裕子の言葉に、仲川の笑顔が消える。

「どうしてんだよ……？」

「……昨日、亞理沙、祐樹先輩に今日家に来てほしいって誘われたの。行くか行かないか。それが、祐樹先輩への返事なのよ

昨日の電話のあと、結局良い案なんて見つからなかつた。

やつぱり仲川が思いを打ち明けることしか。

亞理沙を引き止めることはできないんじやないかって。

そうとしか、考えられなかつた。

「あんた……どうすんのよ」

怒りなのか、呆れなのか。

低く唸るような裕子の声が、三人の間だけで響く。

「そんなこと、言つたつて……」

「マスクコットは？ねえ！仲川！マスクコット、作つてないの？」

今度は悲しそうに眉間に皺を作つて、裕子は仲川の肩を揺らした。

されるがままの仲川に、私はもつゝ、何も言ひじができない。

「なんでも、なんであんたはこいつもーそういうのよーー。」

周りの席にいた人たちが、少しずつこの小さな喧騒に気が付き始め
る。

でも、裕子はやめなくて。

その時、仲川のポケットから、ぽろりと何かが床に転がり落ちた。

「？」

「あつ・・・ー。」

それに気が付いた仲川が、裕子を引き剥がし、慌てて手を伸ばす。

けど。

それよりも早く、私はそれを拾い上げた。

「これ……」

今私の手の中にある、柔らかい白。

フェルトの生地が、雑に扱つたのか、最後に見たときよつもやがわらかにしていた。

「仲川……」

土曜日までは頭しかなかつたマリイちゃんは、もうじつかり体もできていて、顔だつて、リボンだつてじつかりとつけられていた。

でも。

「頑張つたんだけど……そんなんになつちつたんだよ」

それは、正直マリイちゃんと呼べるか呼べないか。

そのへり一、歪なマスク Gottで。

こんなこと言つちや駄目だけど、猫なのか豚のかさえも極しかった。

それを見て、裕子と私は再び顔を見合せた。

仲川の手を見ると、何本かの指先に、乱暴にバンソウゴが巻かれていた。

キーンゴーンカーンゴーン。

その時一時間目が始まりのチャイムが鳴つて。

裕子と私は何も言つてあげられないまま、席へと戻らなければならなかつた。

先生が入ってきて、授業が始まる。

ノートを開いて、先生の流暢な英語を聞きながら、私は仲川の方を見た。

あのマリイちゃんを仕上げるのに、どれだけ時間がかかっただろう。指を針で刺しながら縫い続ける仲川を、なんとなく想像できてる。

仲川はやつぱり、亞理沙のことを見ていた。

少し離れているから、どのような目をしているかは分からぬけれど。

ただ、じつと亞理沙のことを見ていた。

その視線の先の亞理沙は。

仲川とは逆方向の窓の外をぼーっと眺めていて。

仲川が長い間亞理沙を思い続けていたことを知らないように。

やつぱり今も、亞理沙は仲川の視線には気付かない。

皮肉だと思った。

仲川が可哀想だとは思わない。

亞理沙に苛立ちを感じたりなんかしない。

だけど。

ただ、あの爽やかな祐樹先輩の笑顔が。

傷だらけの仲川の手とは天と地のようで。

私は、皮肉だと思った。

そつと、目を閉じる。

先生の英語が、頭の中を流れしていく。

『全然お前に似合つてねーよ』

昨日の夜。

拓也の言った一言。

あの時の冷たい田を、私は何故か怖いと感じた。

離れていつてしまつんじやないか。

『あいつら・・・あんま関わんなんよ』

ねえ。

なんであんなこと言ったの。

切なく揺れる拓也の瞳には、私はビリビリふりふり映っていた。

あの時の口付けは
まるで幻のよし。

信じられない私と、

いつもと何も変わらなかつた今朝の拓也。

あれは、夢だつたんじゃないだろうか。

あの後お互に何も話ひず、ただ夜道を歩いた。

手は、繋いでいない。

一定の距離を置いて、街灯の光を感じていた。

星が見えないなんて、またそんなことを思つたかもしない。

ただそれは、口にすることはなく、沈黙だけがただ流れてい。

家に着くと、「またね」とだけ言つて、なんとも言えない空氣を残したまま、私たちは別れた。

忘れることができない感触と、幻のようにあやふやな感覚。

私の中で、拓也が大きな存在を占めてゐるのに、拓也の中でも、私は大きな存在でいられているの？

わからないことばかりで。

苦しいなんて感じる前に、私はおかしくなつてしまつそうだよ。

その後もなにもなくただ時間だけが過ぎていつて、次の十分休みの間は仲川に話しかけることもできずに、そのまま三時間目も、私たちに構つことなく足速に駆け抜けていつた。

「亞理沙ちゃん」

終礼が終つて少ししたとき、賑やかな廊下から祐樹先輩の呼ぶ声がした。

「あ・・・」

亜理沙は、私達の方を向くと、困ったような照れているような、なんとも言えない表情を見せた。

裕子も私も、亜理沙を引き止めることがなくてできないから。

ただ、曖昧に笑うしかできなかつた。

「亜理沙・・・行つちゃうね」

裕子が、ぼそりと呟く。

「仕方ないよ・・・こればかりは、仲川次第なんだもん」

亜理沙が、鞄をもつて祐樹先輩の立つてゐるドアの方へと歩いていく。

今日は、聰と光太先輩は一緒じゃないのを見て、本当にこれがラストチャンスなんだと思った。

仲川は。

その時仲川は、何をするでもなく、ただマリィちゃんの入ったポケ

ツトを握り締めて、鞄を机に置いたまま突っ立っていた。

亞理沙の方は見ずに、下を向いている。

ああ、もう駄目だ。

長い片思いが、こんな形で終わりを迎えるだなんて。

皮肉以外の、何者でもないじゃない。

その時。

「え？」

亞理沙が祐樹先輩のところへ行くと、祐樹先輩はふわりと笑った。

二人は、高さの違う肩を並べて、靴箱の方へと歩いていった。

唇を噛み締める。

見えなくなつて、これじゃ駄目だつて。

まだ、仲川は、終わりじゃないつて。

「仲川。」

私の前に、仲川がびくと振り返る。

「行きなよー早く、アリサヒト前でひきあひつけよー。」

マリコイチヤン、作ったじゃない。

「でも・・・こんなのが渡せるわけねーだろ

可愛くないかもしれないけど。

でも一生懸命作ったじゃない。

「歸めないでよ

仲川。

「アリサヒト、待つてたかもしれないじゃん

あんたはまだ、負けたわけじゃないんだよ。

「男なり」

だつて畠理沙

「畠理沙の」と本当に好きななり

祐樹先輩のところへ歩き歩いていく途中

「そのマコトちゃんと一緒に、その気持ちがぶつけてこない

仲川、あんたのことを振り返ったんだよ。

「…………」

遠くでチャイムが鳴ったのが聞こえた。

24・マイティアの運営のせて2

24・マイティアの運営のせて2

仲三の田は一瞬やうじと揺らこだ後、ぎゅうと力の入ったものへと変わった。

心を決めた、男の田。

それはたぶん、祐樹先輩にも負けないんじやないかな。

「イッショ行つて来るわー！」

そう笑つた後、仲川は走つて教室を出て行つた。

手には、あのマイティアちゃんを握つ締めて。

「尚美、あんたこきなつじうしたのよ。」

隣にいた裕子が驚いたよつたな顔をしている。

「ん?なんか、ちよつと背中押してあげたくなつたのよ。」

だつてあんなの。

見ていられなかつたんだもん。

じれつたい恋は、ドラマだけで充分。

亞理沙も仲川も。

祐樹先輩には悪いけど。

ピエロに踊らされた哀れな主人公になんて、なつて欲しくないじやない？

「国本——！」

窓の外から仲川の声が聞こえて、一人で窓のほうへ行く。

見ると、もう校門に続く坂に差し掛かった亞理沙と祐樹先輩めがけて、仲川がグラウンドを横切り突っ走っていた。

「俺は——！」

仲川の声に、亞理沙たちは足を止める。

「ぐーにーもーつ？！」

しかし、グラウンドの半分まで来たとき、仲川は足を絡ませて見事にこけた。

「あつ」

裕子が不安げに声を上げる。

なかなか起き上がらない仲川。

そうこうしている間に、祐樹先輩は亞理沙の肩を抱いて、少し無理矢理に坂を下り始めた。

亞理沙と祐樹先輩がどうどう見えなくなる。

「仲川・・・」

もう、駄目なのかな。

ねえ。

亞理沙。

もつ、仲川は駄目なのかな。

絶望的に裕子が窓の外から視線を逸らした時、仲川がゆっくつと起き上がった。

そして、

「国本……お前が好きだ……。」

叫んだ。

「俺はーお前じやなきやー駄目なんだよーーー。」

その大きな愛の告白に、隣の教室からも何人かが窓から顔を出す。

それは、少し古い恋愛ドラマのワンシーンのようだ。

私は、『告白は、夕方の海で好きだつて叫ばれてみたい』って書いた西理沙の台詞を思い出した。

「あつー。」

裕子の声が明るくなる。

仲川に向かって、亜理沙がグラウンドを横切って走っていた。

「よかつたね、仲川。」

私はぼそりと呟いた。

仲川。

亜理沙には、あんたが丁度いいのかもしれない。

そりや、外見だって精神面だって祐樹先輩のほうがずっとかっこいいけど。

でも、亜理沙を想う気持は。

多分あんたに敵うやつは誰もいないよ。

「仲川、よかつたじやん。」

「え？」

突然聞こえたその声に振り返ると、拓也がいつもの笑顔で立っていた。

「え、何で拓也いんの？帰ったんじゃなかつたの？」

当たつ前のようにここにいるけど、終礼が終わつてすぐに姿が見えなくなつたから、つづきつもう先に帰つたんだとばかり思つていた。

「ん？ お前を置いて帰らねえよ。おひ、仲川も一件落着したわけだし、俺らもさうと帰るわ。」

「あ、うん。」

アリの戻つくるをか歩いていく拓也を、鞄を引っ掴んで追いかける。

「じゅあな、中間。」

「裕子、ばこばこ。」

「ばこばこ。」

裕子に手を振つて、廊下へと进る。

教室を一歩出れば、もつ蒸し風呂みたいに暑かつた。

「拓也、今まで何処にいたのよ？」

「んー内緒ー」

くすりと笑つて誤魔化す拓也。

大したことじやないよと付け加えたけれど、私は逆にそれが気になつた。

私に言えない」と?

ゆっくり歩いて。

そんなことを考えながらお手洗いの前を通りかかつたとき、女子用の方から出てきた生徒と見事にぶつかってしまった。

「「あんなさ・・・あ

顔を上げると、

「柴山・・・わん・・・」

田を真つ赤に腫らした柴山わんが立つていて。

私を見るなり、柴山わんはキッと睨み付けてきた。

「ここの氣にならないでよ。あんただって違うんだから」

やつはつと柴山さんは、一瞬拓也の方を見てからまた苦しそうに顔を寄せて、教室のほうへと走っていった。

「今の、なに?」

全く理解できなこやつさの台詞。

何をいい氣になるのか。

私が何と違つとこ'うのか。

「ねえ、拓也も今の

言ひながら拓也のほうを向く。

けど、最後まで言ひことができなかつた。

「尚美、帰る?」

「・・・つる」

また、並んで廊下を歩き出す。

もう何も聞けない。

柴山さんのことは口にしないほうがいい。

だって、さつきの拓也は、今まで見たことがないよ、すぐ不安そうな顔をしていたから。

でも。
なんとなく。

さつきの柴山さんの涙は、拓也が少しは関係しているんじゃないかなって。

大したことじやないよ

くすりと笑った拓也の言葉が、何よりも私の胸を搔き乱した。

25・ソファに預けて

25・ソファに預けて

「ただいま」

誰もいない家の中に、私の声が響く。

お父さんもお母さんも共働きだから、私は結構小さいときから鍵っ子だった。

別に、寂しいなんて思わないけど。

靴を脱いで、中にあがる。

リビングに入ると、すぐにクーラーのスイッチを入れた。

ゴーッといつ機械音と共に、涼しい風が回りだす。

ソファの上に鞄を置いて、洗面所へ。

帰つてきたら手を洗う。

これは富崎家の決まり。

洗面所は脱衣所と一緒になつていて、その奥にお風呂がある。

お風呂の換気扇の音が低く響いていて、暗いままの洗面所は、少し
だけホラー映画に出てきたやうだと思った。

電気のスイッチを押すと、淡い肌色の光が中を照らして。

なんとなく、ほっと一安心。

鏡の方を向くと、もう一人の私と目が合った。

「なに、そんなに不安そうな顔してるのよ。」

もう一人の私に話しかける。

「何もない。あの言葉通り、きっと大したことなんて何もないんだ
から。」

それでも鏡の中では、やつぱり不安そうに瞳を揺らしていく。

どうして。

何を隠す必要があるの？

私には、何故言えないのよ。

ねえ拓也。

隠し事なんてされたら、私。

不安でたまらなくなるじゃない。

あの赤い柴山さんの田が、頭の中で私を睨む。

キシヒ。

鋭く私を睨みつけてくる。

いい氣にならないでよ

赤い田の柴山さんが囁く。

いい氣になんて、なつてないわよ。

あんただつて違うんだから

そんなこと言われたつて。

何が私と違うって言つたの？

なんで柴山さん泣いていたの？

今日の放課後の間に、一体何があったの？

柴山さん。

それはやつぱり、拓也と何か関係が・・・。

「あーー！駄目ー！考え出したりとまらないーー。」

ブルブルと頭を振って、絡まつた思考を追い払う。

その所為で髪が軽く乱れた。

「そもそも。どうして私が睨まれなきやいけないのよ。」

うん。

本当にそう。

私別に何もしてないんですけど。

仲川を応援していたことがそんなにいけませんかねえ？

「事情すら知らないのよ、私

考えれば考えるほど腹立たしいことかもしれない。

くすりと笑つて誤魔化した拓也も。

赤い目で睨んできた柴山さんも。

二人が何か関係していく、そしたら私は一体何をするつもりなのよ。

もう、どうでもいいじゃない。

蛇口を止めた後、手を振つて水を払う。

ピッピッと何滴か鏡にかかってしまい、手をタオルで拭いてから、適当にティッシュで拭いておいた。

「やつでしょ？」

ねえ尚美。

「だから、もう考えちゃ駄目。」

私は手で乱れたままだった髪を整えて、リビングへと向かった。

リビングのドアを開けると、クーラーが大分利いてきて、ひやりと涼しかった。

チャラランチャララン

「あ、携帯」

いつものメロディが、ソファの上の鞄の中から流れ出す。

鞄を少し乱暴に掴みあげて、中から震えている携帯を取り出した。

ディスプレイには、以外にも『笹塚美奈』と表示されている。

「美奈？どうしたんだろう？」

パカリと開き、通話ボタンを押した。

「もしもし」

『もしもし…尚美？』

「美奈。どうしたの？」

美奈と離れて早三ヶ月が経とつとしていた。

それから連絡をとつていなかつたわけではもちろんない。

毎週土曜に、決まってどちらかが電話をかけ、軽く一時間は話している。

これはもういつ頃慣なのだ。

だから余計に、今の電話は疑問に思つ。

平日には美奈が電話してくれるなんて、あんまり無い事だもん。

『『『めんね、急に電話しちやつて。忙しかつた?』』』

「ううん、大丈夫。今家に帰つたとい。」

よかつた、と電話の向ひで安心したような声を出す美奈。

美奈は少し心配性の氣があるかもしれない。

「で、どうしたの? 何かあつた?」

いつもと違つて口で電話をしてくるといつとせ、あつと何か言えな
きやいけないことがあるのだろう。

『あ、うん。尚美はもう夏休みだよね?』

「そだよ。明日で補習も終わりだし。美奈のところせっ。

『私は今日で補習終わったの。ねえ、八月三日つて空いてるつ。』

八月三日。

「ん、ちょっと待つてね。」

電話の横の壁に貼られたカレンダーをペラリと捲り、八月のページを見る。

「三日だよね。」

『うそ。』

一日、二日、三日。

うん。

特に予定なし。

「大丈夫。空いてるよ」

『本当？よかつた。拓也も空いてるかな？』

美奈の声が嬉しそうに弾む。

「え？拓也？ビリして？」

『三日、私、尚美のところに遊びに行こうと思つてー。』

「え、本当？！」

『うんー。』

思わぬ朗報に、私の声も明るく弾む。

美奈と会える。

美奈と会える！

『だから、拓也も都合大丈夫かなって思つて。』

「あー、拓也なら大丈夫でしょ。」

夏期講習なんてとるつて言つてなかつたし、旅行に行くなんて話もしてないし。

『わづかな？』

「うふ、うだよ。」

『うだよね！よかつた、一人に会えるー。』

携帯を持つて嬉しそうに笑う美奈の笑顔が眼に浮かぶ。

私だつて、もちろん嬉しい。

「ねえ、うけに泊まつてくでしょ？」

『あーうづな。四日は朝から予定があるから、二日は夜帰る。』

「え、そうなの？」

美奈が北海道に引っ越してしまつ前は、よくお互いの家にお泊りをしたものだ。

そのときは男の子である拓也は少し仲間外れにしてしまつたけれど。

「残念。」

『「じめんね、尚美。ありがと。』

「「ううん。一応拓也にも予定聞いておくね。」

『「そうして貰れる? 無理そうだったらまた連絡して欲しいな。』

「OKOK。」

『「助かる。じゃあまた電話するね。』

「あ、うん。またね」

バイバイといつも愛らしこ声の後、ブツリと電話が切れた。

プーパーという機械音が流れて、私も電話を切る。

携帯を手に、ぼふりとソファに座り込んだ。

全体重を柔らかいスプリングに預けてしまつ。

「八月三日か・・・」

今が七月二十五日だから、あと一週間とちよつと。

「楽しみだな・・・」

連絡は毎週取つている。

だから声だつて聞いているわけだけど。

電話越しで話すのと、会つて話すのとでは、やっぱり全然違つじゃない？

美奈が引っ越してしまつてから、まだ一度も会つていない。

美奈、変わつていないうちか。

もしかして少し太つてたりして。

北海道つて食べ物おいしそうだし。

でも、痩せ細つてしまつより、少し太つた方が幸せそでいいかも
しない。

拓也、予定大丈夫かな。

よし。

早速聞いてみるか。

また携帯を開き、拓也のアドレスを呼び出す。

カーソルを合わせた後、通話ボタンを押した。

プルルルという呼び出し音が静かに響く。

『もしもし』

「もしもし、拓也？ いいお知らせがありまーす！」

拓也の声が聞こえた途端に、私は喋りだした。

「拓也、二つて空いてる？」

『二つ？ もう七四二四はとくの廿に過ぎてんぞ。』

「八月三日に決まつてんでしょうが！」

真剣に答えた私に、拓也が可笑しそうに小さく笑う。

『冗談に決まつてんだるーが。あー、空いてるけど。』

「おおー・やつぱりねー」

私の読みは正しかつた。

『やつぱりねつて・・・お前それちよい失礼。てか、なんだよ? い
い知らせつて』

不思議そつな拓也の声。

それと一緒に、電話の向こうからは何度か聞いたことのある洋楽が
かすかに聞こえた。

「それはねー。美奈が、いっしょ遊びにきてくれるつでー！」

口にしただけでも嬉しくてたまらない。

楽しみで仕方がない。

だから、

『え・・・』

すげく拓也も喜ぶだろ?と思つていたから、少したじろいだ様な拓也の声が返ってきたのは私にとつて予想外だった。

「拓也?」

『あ、あー、そつか。うん。楽しみだな』

いや、あんた全然そんな感じじゃないでしょ。

最後の方は確かに声は明るくなつていただけど。

『三日、俺は大丈夫だから』

「あ、うん」

『なんかあつたら、また教えてくれよな』

じゃあ、と言いつと、拓也は一方的に電話を切つてしまつた。

今のは一体何だつたんだ。

今日の拓也は、やっぱりおかしい。

思ひ出しちゃなくて、考へたくなくて、あの柴山さんの赤い目
が、どうして私を睨んでくる。

私はまた頭を振つた。

考へない考へない。

今は三日のことだけ楽しみに待つていればいいの。

そう自分に言い聞かせて。

ソファに体を預けたまま、私は静かに目を閉じた。

26・出口の無い不安

26・出口の無い不安

補習最終日。

学校に行きたくないな、なんて。

朝起きたとき何故かそんなことを思った。

それがどうしてかなんてわからなかつたけど、やっぱり昨日の拓也の反応が引っ掛かっていることは確かだつた。

おかしな態度。

おかしな反応。

昨日私がいなかつた拓也の時間に、何ががあったんだ。

わいつ。

私には言いたくない何かが。

「おはよ、尚美! でか聞いて、ビッグニュースよ。」

教室に入るなり裕子が駆け寄つてくる。

もちろん隣には亞理沙が。

「おはよ裕子。亞理沙、仲川とよかつたね。」

私の言葉に亞理沙の顔が一瞬で赤くなる。

相変わらず可愛い子。

「私の」とはいいの!」

「尚美、真剣に聞きなつて。」

「なに、どうしたの二人とも。」

そんなに興奮して。

そんなに大変なことがあつたのかな。

「あそこ、見て。」

裕子が目線を動かして示す。

私は言われるままにそちらを向いた。

「柴山さんの、席？」

そこにはまだ主が来ていない空っぽの机と椅子。

柴山さんの席。

「今日、多分来ないよ。あいつ。」

あいつ、ところのまちあいん柴山さんのことだ。

「でも柴山さんの遅刻なんていつもの…」

柴山さんの遅刻がどうしてそんなに大事なんだら？

「違うの、尚美。やうじやないの。」

亞理沙が首を横に振る。

「フラれたんだって。」

「え？」

「拓也が柴山さんをフツたりじこよ、昨日。」

私は再び柴山さんの席を見た。

周りをみると他の生徒たちもけりけりと柴山さんの席を見ていた。

もつ噂はまくに広がっていく。

「でも、そんなの、ただの噂かも」

「やつでもないみたいなの。」

私の意見を亞理沙が遮った。

「実際にその現場を見たって子がいるんだって。」

キーンローンカーンローン。

「いいでチャイムが鳴った。

「また後で」と言ひて裕子と亞理沙が席に戻つていく。

先生が入つてきて挨拶をして席についた。

出席をとつてゐる間、私はぼおつと拓也の方を見た。

拓也はギリギリに教室に入つてきただよつて、今は鞄からペンケースなどを取り出していた。

昨日亞理沙と仲川を見ていたあの間。

拓也がいなかつたあの時。

きつと拓也は柴山さんに呼び出されていたんだ。

柴山さんはどんな言葉で拓也に想いを伝えたのだろうか。

拓也は本当に断つたのだろうか。

ふいに拓也と目があつた。

優しく笑つてひらりと手を降つてきた。

私はなんとなく笑つてから窓の方を向いた。

いつもと変わらない拓也。

だけど状況は昨日から大きく変わつていて。

結局、先生が名前を呼んでも、柴山さんの返事はかえってこなかつた。

* * * * *

「じゃあ尚美は柴山が泣いてるの見たんだ？」

お昼休み。

バナナ・オレを一口飲んで裕子が言った。

手元にあるサンダウイッチはもう半分ほどなくなつていて、

「うそ。トマトから出でてるとこだつたんだけど、目が赤かつたから。」

あんただつて違うんだから

あのときの柴山さんの赤い目が頭の中に甦る。

私はお弁当に入っている肉ボールを割り箸で突き刺した。

「仲川と亜理沙がくつこてる間にそんなことがあつたなんてね。」

「私のことほいいからー。」

裕子の言葉に本田一一度田の亞理沙の赤面。

それを見て私と裕子が笑う。

「西園一」

急に名前を呼ばれて箸を止めた。

デアに近い席の男子がこちらを向いている。

私は裕子と亞理沙に「ちゅうじーめん」と断つてから席を立った。

「じゅー」

「おしゃべりマナイヤタ」

ムカつく声と呼び方。

「うわ、恥。」

廊下の壁に凭れるみつにして立つてゐる河本聰。

「どうや、ひこつが私をよんでいたらしき。」

私は廊下に出て聰の横に立つた。

「うわ、何だよ。」

「べつべつ。」

「俺が直接会こさせていたんだからもうと喜べ。」

「は？ だれが。 あんたのその無駄な自信は一体どこからでてくるわけ？」

「無駄つてなんだよ、無駄つて。」

「で、何の用よ。」

「やつぱりムカつく奴だ。」

ドリームパークでカツコイイだなんて思つたのはきっと何かの間違いだな。

「あ、やつやつ。今日の放課後あかとけよ。」

「はー。」

「じつせんだる。」

「は。
なんだこいつ。」

「光太がどうしても裕子ちゃんを喋りたいうじへてた。」

なるほど。

「…理沙は行けないよ。」

祐樹先輩には悪いけど。

もう理沙は仲川のものだし。

「わかつてゐつて。祐樹もそんなに執着する奴じやな」

「尚美ー。」

聴を遮るよつにしてその声が耳に入った。

私を呼ぶ声。

「拓也。」

いつもの笑顔。

拓也は駆け寄ると私の手首をぐつと掴んだ。

「たく、 や?」

「今から自販に行くんだけど尚美も一緒に来いよ。」

手首を掴む手に力が入る。

「お前、この前の幼なじみじゃん。」

対して露骨に嫌そうな顔をする聴。

「え？ ちよつ、拓也？」

「え？ ちよつ、拓也？」

半ば無理矢理手を引っ張られて歩き出す。

拓也の顔にはやつぱり笑顔が貼り付けられていて。

「マナイトー後でメールするから！ 裕子ちゃんにも伝えといじ。」

聰の声を背中に受けた。

私は返事もできずに拓也にただ引っ張られていく。

ぐいぐいと腕が痛い。

「拓也？」

呼んでも振り向いてくれない。

拓也は今どんな表情をしているんだろう。

それすらも分からない。

「ねえ、拓也てばー。」

ぐいぐいぐい。

指が手首に食い込む。

生まれる摩擦。

痛い。

「痛、いよ……」

私がそつと離つと、ぱっと手が放された。

手首を擦る。

少し赤くなっていた。

「お前さ、俺の言ったこと忘れたの?」

「え……?」

靴箱のすぐ近く。

昼休みはあまり人気が無くひつそりとしている。

「あいつは近づくなつて。言つたよな？俺。」

くるつといからを回いた拓也はもう笑つていなくて。

その目はスッと細められた。

「や、そんなの……拓也だつて……」

拓也だつて、柴田さんとずっと一緒にいたじゃない。

「俺が、何だよ。」

「じゃあ拓也は昨日の放課後何してたの？」

「は？」

野球部の掛け声が遠くで小さく聞こえる。

「柴山さんと何があったの？」

「今は柴山は関係な」

「どうして、どうして何も教えてくれないの？」

私の言葉に拓也は眉を寄せた。

「どうして、あの時キスしたの……？」

わからぬことばかりなんだよ。

「……それは」

知りたこと思えば思つぽい。

不安は募るばかりで。

「……んなの、なんとなくに決まってんじやん。」

ほひ。

また一つ。

「…そつか…。」

拓也がわからなくなる。

「とにかく、もつあいつらと関わるなよ。」

ぽんと私の頭に手をのせて、一度だけ優しく笑つて。

拓也は自販機のある中庭へと走つていってしまつた。

拓也に触られた髪にそつと触れる。

わからない。

わからない。けい。

それでもやつぱり

私は拓也が好きなんだよ。

「…ばか。」

私はもう見えない拓也の背中に呟いた。

「ねえ、昨日の見たつて本当?」

「本当だつてば。」

「ふいに聞こえてきた喋り声。

私は近くの靴箱に静かに身を隠した。

「柴山さん、いい気味よね。男子に色田使つてばつかだつたし。」

「確かに。私もあんまり好きじやなかつたんだよね。」

柴山さんの畠前にびくつと反応した。

耳を澄まして次の言葉を待つ。

「じゃあやつぱり木高くんは富崎さんなのかな。」

二人いりひの片方が言った。

まさか私の名前が出てくるなんて思いもしなかつたから驚いた。

拓也の相手が私。

嬉しいような恥ずかしいような
そんな気持ち。

「んーそれがちょっと違つみたい。」

「え?」

「ぐりと
息を呑んだ。

「断られた後に柴山さんが、木高くんが好きなのは本当に高崎さん
?って聞いたの。」

柴山さんが拓也に。

「木高くんが本当に好きなのは高崎さんじゃないの?って。」

え?
美奈?

「やしたら木高くん、何も答へなかつたのよ。」

「あー笹塚さんかー転校しちやつたけど木高くんと仲良かつたもんねえ。」

「そうそう。可愛かつたし性格も良かつたしね。」

ちらりと話している一人が見えた。

体操服を着ている。

今から部活なのかもしれない。

「じゃあ笹塚さんだ。悪いけど面騎さんより笹塚さんが、正直木高くんに似合つてゐる。」

その後一人の話題は夏休みの予定へと移り、明るい笑い声と共に中庭の方へと歩いていった。

再び静寂が戻つてくる。

しんど。

夏の喧騒は、
どこか遠く。。

私は、教室に向かつてゆつくつと歩き出した。

戻らなきや。

もつすぐ午後の補習が始まる。

戻らなきや。

戻らなきや。

「尚美、ちゃん？」

足を止める。

「やつぱり尚美ちゃんだ。つて、ビーフしたの、泣いてるじゃないか。

」

泣いてる？

私、泣いてるの？

「う、うう……。」

「大丈夫大丈夫。」

ぽんぽんと、優しく頭に手をのせられる。

拓也がしたのと
同じように。

涙が止まらなかつた。

原因は、
多分分かってる。

別に、拓也が私を好きだと思っていたわけじゃない。

だけど。

少しばかりは可能性があるんじゃないかなって。

考えても見なかつたんだ。

美奈と拓也なんて。

笑える。

笑いたいのに笑えないけど。

涙が邪魔して。

お似合いの二人。

私なんかよりずっと。

あんただつて違うんだから

紫乃さんが私は嘘つ。

赤い目をして。

今の私と回りよつ。

今、やつとわかつたよ。

私も違うんだね。

だつて拓也には

美奈がいるじゃない。

「そんな状態じゃ授業無理だしそ。」

優しい、声。

「少し廊上に行ひつか。聴も呼んで上げるかい。」

うひじて聴なのよ。

そう思つたけど言わなかつた。

私は祐樹先輩に支えられながら、ゆっくりと屋上へと向かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5682d/>

あんたの隣は私でしょ

2010年10月16日13時30分発行